熊本支部設立 40 周年記念誌



製 日本山岳会熊本支部



奥野名誉会員祝賀晚餐会 1996年1月7日 熊本厚生年金会館



日本山岳会九州四支部合同会議記念登山 平成5年9月26日 阿蘇高岳



日本山岳会熊本支部秋季例会

平成8年10月20日 九重黒岳



熊本支部設立 35 周年記念カナディアンロッキー登山 (1992.7)

目 次

倍支	設立 4	10周年を	を迎えて		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	ځځ	を 部長	本田	誠也	·· 1
祝	辞	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	E	1本山岳	会長	斎藤	惇生	2
熊本	支部創	N立40周	9年記念	念誌に寄せ	!て		·福岡戈	京部長	松本	徰夫	4
お祝	{\sum_{\substack} \sum_{\substack} \substack}	••••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	••••••	······································	を別式	京部長	梅木	秀徳	6
歷史	の重み	ょに、あこ	こがれと	∠啓発		••••••	·宮崎3	京部長	大谷	優	7
回廊	と展望	<u> </u>	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	••••••	• • • • • • • • • • • • •	ر	で部長	本田	誠也	9
4 0	周年を	を顧みて…	•••••	•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	…·支部	屬問	西沢	健	14
我が 内なるアルピストの魂											
슾	員 近	í 況	••••••	•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	31
	中村	恵二	河上	洋子	鶴田佐	E 知子	樋口	格	神谷	平吉	
	神谷	文子	広吉	功	阿南	誠志	加藤	功一	田上	. 敏行	
	吉田	恒子	和仁古	5 昇	後藤	之俊	出来田	耕介	門脇	愛子	
	石井	久夫	工藤	文昭	松本	莞爾	広永	峻一	佐藤	光俊	
	池崎	浩一									
支部	【年表·	• • • • • • • • • • • • •						• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		•••••	43
支部規約											
圖代支 部役員表											
会員	名簿・				• • • • • • • •				•••••	• • • • • • • • • • • • •	54
4 :3	侵会	支部役員		• • • • • • • • • • • •		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	* * * * * * * * * * *			. 56
熊	本	4 0	Щ	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	•••••	• • • • • • • •	57	



熊本支部設立40周年を迎えて

熊本支部長 本 田 誠 也

私共の熊本支部は、今年で設立40周年を迎えました。創立93年という日本山岳会の長い歴史に比べると、まだ、その半ばにも達していませんが、私共、熊本支部会員にとりましては、まことに喜ばしい年であります。この記念すべき年を迎えることが出来ましたのは、支部会員の努力もさることながら、日本山岳会本部及び九州の各支部等の、ご指導、ご鞭撻の賜物と深く感謝いたします。熊本支部は、昭和32年(1957年)に福岡支部と、ほぼ同時に全国で12番目、或いは13番目の支部として発足しました。以来、10年毎に記念行事を行って参りましたが、偶然にも10年毎に10名づつ会員数が増加いたしました。現在は41名でありますので、会員数から云えば緩慢な発展をしてきたわけであります。

10年前の昭和62年に、支部設立30周年記念集会を開催しました。また、記念 誌を発行して、30年間の支部運営の歴史を総括しました。その結果、少人数の支部 にしては「よくやって来た」と云う感想でありました。もっとも、13年目あたりま では諸々の事情で休眠状態もあり、さしたる活動は出来ませんでした。しかし、それ 以後は例会登山の実施、他支部との交流、特に昭和47年(1972年)から、昭和60 年(1985年)にかけて、今西錦司先生(元・会長)との一連の登山は、支部の特別例 会として実施しましたが、他支部との協力関係も含めて、大いに支部活性化に寄与し たと思います。また、懸案の海外登山については、関係の方々のご尽力により、昭和 63年(1988年)日・中・ネ3国友好チョモランマ/サガルマタ登山隊、及び平成7 年の"95マカルー登山隊に、支部の馬場博行会員が隊員として参加しました。その ほか、平成4年(1992年)には、支部設立35周年を記念して、カナディアン・ロッ **キー登山隊10名を派遣、及び、チョーオュー/シシャパンマ登山隊(カトマンズク** ラブ主催)に馬場博行会員が参加しました。今年、日本山岳会長に就任された斎藤惇 **生氏は、熊本県出身でもあり、私共はたいへん親近感を持たせて頂いていますが、会** 長並任にあたり「山登りは、それぞれのパイオニアワーク実践を」と訴えられました。 **まことに同感であります。私共は、その精神をもって、さらに精進して行きたいと考 えて**います。



日本山岳会長 斎 藤 惇 生

熊本支部の皆さん、設立40周年おめでとうございます。また、記念誌も発行されるとのことで、重ねてお祝い申し上げます。

私は熊本県内で生まれ、熊本市で育ちました。山登りの洗礼を受けたのが昭和23 年、旧制第五高等学校の1年の時、阿蘇高岳の鷲ヶ峰のロック・クライミングでした。 そのため熊本支部は故郷の支部であり、特に関心を持っています。

熊本支部は、阿蘇を中心に独特な登山を行っておられた北田正三さんが呼びかけられて創立され、当初支部員が規定数の20人に満たなかったが、本部理事の折井健一さんの特別な計らいで、設立に漕ぎ着けたと聞いています。これは、JAC支部設立のおおらかな隠れた秘話の一つではないかと思います。

この当時、九州には支部はなく、福岡支部と熊本支部が同じ年に創設されています。 創設後、熊本支部は主に九州の山々を活動の対象とされ、地理的には九州の中心に位 置する関係から、後に設立された東九州支部、宮崎支部などとの世話役、まとめ役的 な役割を果たしてこられました。

日本山岳会長も務められた今西錦司先生は、戦後すぐより京都から九州へ度々研究調査に行かれました。都井岬の野生馬、幸島、高崎山の日本猿を調査し、餌付けにより猿の個別識別をして、生態、社会構造を研究する方法を確立、日本の猿学の進歩に大きな貢献をされました。先生の調査旅行には必ず登山が組み込まれていました。日本山岳会の会長に就任された頃より、専ら登山を主目的に九州に来られました。先生の登山には、元支部長の西沢健一さん、現支部長の本田誠也さん、東九州支部の西孝子さん、宮崎支部長の大谷 優さんをはじめ、多くの人たちが献身的にサポートされたと聞いています。頑固で勝手なところもありましたが、その反面、心の底から山登りが好きで、何か人をひきつけるところがあった今西先生は、これに接した熊本支部の皆さんにも、大きな影響を残されたのではないかと思います。

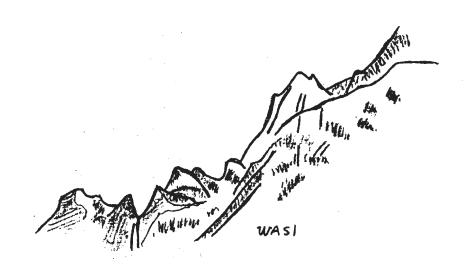
熊本支部には馬場博行さんがいます。1988年、JACが中国、ネパールと合同でチョモランマの交差縦走登山に成功した時、九州から唯一の隊員であった馬場博行

さんを知りました。彼のヒマラヤにおける登攀活動には目を見張るものがあります。

1992年にはチョーオュー(8201m)の無酸素登頂に成功しました。彼の登り方を見ると「肥後モッコス」の精神に溢れた登山家という感じがしてなりません。

九州には、中心に緑濃く懐の深い背梁山脈や祖母山があり、また阿蘇、九重、霧島など独特の美しい山容を誇る火山があり、さらに南海には屋久島の山々と、登るべき山は羨ましいほど沢山あります。

40周年を迎えた熊本支部が、これからも福岡、東九州、宮崎の各支部と力を合せて、日本山岳会の発展にお力添えをいただくよう、希望し、期待して止みません。





能本支部創立40周年記念誌に寄せて

福岡支部長 松 本 徰 夫

熊本支部創立40周年おめでとうございます。

貴支部の本田支部長から記念誌の発刊に当たり、原稿を依頼されましたので、貴地 の山々の思い出などを、少しばかり述べる事ことにします。

福岡には、貴地にあるような魅力的な山が少ないこともあって、若い頃から貴地の 山々には、随分親しんで参りました。とくに阿蘇や九州脊梁の山々です。

福岡の岳人諸氏も、貴地の山々には多数出かけております。その中でもっとも足し げく通ったのは阿蘇でした。火山爆発などの研究や、外国人の案内で、火口周辺や外 輪山も歩きましたが、やはり鷲ヶ峰から高岳、根子岳によく行ったものです。これら の山行は、岩登りの技術修得が目的でした。私として、もっとも情熱的に通ったのは、 1950年代から、60年代にかけての時期でした。その頃、仙酔峡や岩場で、熊本 の方々(熊本RCCや、電電九州山岳会など)にもお目にかかり、親しくしていただ きました。鷲ヶ峰周辺で遭難者の救助作業を、熊本の方々と一緒にやった悲しい思い 出もあります。1958年7月27日、鷲ヶ峰の山頂でピッケルを持たれた北田正三 氏(熊本支部初代支部長)に、お会いしました。挨拶を交わしたあと、私らは第二キ レットから高岳に向かいました。北田氏は単独で竜尾根を下降されたのですが、転落 されたのでした。翌朝、赤壁上部の東側(通称左巻きルート、松ヶ尾谷の源頭)で、 無言の氏に接しました。阿蘇の父と呼ばれ、1928年、根子岳西尾根の初縦走、翌 29年には鷲ヶ峰~高岳の初縦走など、輝かしい足跡を残された巨星は、ホーム・グ ラウンドともいうべき、阿蘇で命脈を絶たれたのでした。この時は、根子岳での遭難 と重なり多くの岳人が、そちらに行きました。28日、北田氏が帰宅されないと連絡 が入り、熊本の1パーテイ(熊本RCC)が竜尾根を登って来られ、私たちと鷲ヶ峰 の遭難現場で合流しました。翌29日の夕刻、多数の救助隊員と一緒に一の宮の自宅 に帰られたのでした。根子岳での遭難者は、福岡県関係者でした。この他にも福岡関 係者が阿蘇で遭難して、その度に地元の熊本の方には、多大な迷惑をかけて来ました。 阿蘇の岩場で育まれた岳人が、ヒマラヤや南極など世界の山に向かったのも事実です。

かくいう私を含めて、福岡支部にも何人かいます。ここで改めて熊本の皆様と、阿蘇 の岩場に感謝いたします。

九重の飯田高原から、牧ノ戸峠~瀬の本~久住高原~宮地~高岳~高森~五ヶ所~ 祖母山~尾平の山旅は、1950年のことでした。現在のように交通の便があるわけ でなく、すべて歩き通したわけですが、牧ノ戸峠から久住高原や、高岳、祖母山の登 山でも、全く人と会いませんでした。

1952年の暮れから翌年にかけて、湯山~市房山~米良荘~大河内~椎葉~尾前~向霧立越(五勇山~小国見~大国見)~角割谷下降~堺谷~霧立越(水呑の頭~白岩山)~波帰~鞍岡~日向八戸~鹿川~鹿納岳~大吹谷~洞岳~川ノ詰~傾山~九折と歩きました。この山行は、故立石敏雄氏や、梅木秀徳氏(現在JAC東九州支部長)らと一緒でした。この時も、山では登山者に一人として会わない静かな山旅でした。国見岳から高岳、三方山を目指したのですが、かっての向霧立の駄道(当時の5万分の1地形図に記入してあった)は、スズタケに覆われてしまい、終始ヤブ漕ぎでした。ついに高岳は諦め、やむなく角割谷を下降しました。大晦日の夜は途中で野宿するなど、えらく難渋しましたが、今となれば懐かしい思い出です。

40年ほど前のことですが、砥用から二本杉峠、五家荘の山旅をしたことがあります。今のように車が通るわけでなく、もちろん徒歩です。二本杉から雁俣山に登ったあと、峠の茶屋で昼食に冷奴を食べました。その豆腐の大きいこと、乾いた喉にとてつもなく美味しかったこと、おかげで前日から持参した昼食分は余ってしまいました。私ごとになりますが、亡父、松本唯一と、長兄、幡郎が熊本大学にいたこと、研究テーマーのメインが阿蘇火山であったことなどで、親子二代、私を含めて3名が、熊本支部のお世話になっているわけです。ところで、福岡支部も、今年が40周年ですが、休眠状態が長いこと続きましたので、貴支部に及ぶべくもありません。今後も福岡支部のご指導をよろしくお願いいたします。

貴支部の、これからの益々のご発展を祈念いたしまして、ペンを置きます。

お祝い



東九州支部長 梅木 秀徳

熊本支部の創立40周年を心からお祝い申し上げます。貴支部は、私ども東九州支部 から見れば、三つ年長の兄・姉ということになります。しかも同じ中部九州に位置し、 阿蘇をはじめ、くじゅう山群や祖母山などの山域を共有する関係にあり、まさに兄弟 ・姉妹の間柄とも言えましょう。それだけに、貴支部が記念すべき節目の年を迎えた ことは、私たちにとっても大きな喜びです。加えて、熊本県と大分県は九州の西と東 にありながらも、古くは肥後・豊後街道、現代は国道57号線や九州横断道路、JR 豊肥線などを通じて、人・物・情報、つまりは文化を交流させてまいりました。その 過程で、大分は多くのものを熊本から学びました。熊本は文化の面でも大分の師匠に 当たります。登山は、とりわけ近代登山は「文化」と深い関係があると言われます。 登山の隆盛は、文化を見る場合の尺度の一つだとも語られています。その点でもまた、 東九州支部の創立に当たって、大分に大きな文化ショックを与えた地域として、先輩 ・貴支部のみなさんのご支援があったことを忘れることはできません。同時に、登山 は「自然」を足場とするものです。地域文化は地域の自然に育まれると言うように、 豊かな自然があってこそ登山は成り立ちます。その面でも、比較的に良く自然度を残 す熊本・大分地域は恵まれた登山の土壌を持っているとも考えられましょう。だが、 登山の自由を満喫できた戦後半世紀の平和のなかで、今や「自然」も「文化」も変貌 しようとしています。各種の開発などによって、地球の危機が叫ばれるなか、山や高 原にも多くの破壊の手が延びています。登山人の基本的な姿勢や気風もまた、変化す る文化のなかで移り変わろうとしています。その是非は置くとしても、今や私たちは 自然や文化について改めて考え、登山についても内省する時期を迎えたのではないか と思ってもみます。そうしたことでもまた、先輩である貴支部の東九州支部へのご指 導をお願いしたいと存じます。当支部もやがて創立40周年を祝うことになりますが、 少しでも貴支部に追い付けるよう努力を重ねるつもりでいます。

熊本支部のますますのご隆盛をお祈り申し上げます。



歴史の重みに あこがれと啓発

宮崎支部長 大谷 優

-伝統に敬意-

熊本支部創立40周年を心からお祝い申し上げたい。40周年の歴史と歳月は、決して平坦な道ではなかったと思う。谷あり崖あり急登あり、また道なき道を探し求めての歩みだったとも想像される。その道を、ただ、ひたすら歩かれたからこその意義深き40周年の節目を迎えられたのである。

登山の先輩、大島亮吉は、その著者「山ー紀行と随想ー」の中で、「道のありがたみを知っているものは、道のないところを歩いたものだけだ。」と言った。行くには行けず、帰るには帰れないという、右往左往した山行の体験から生まれた含蓄のある言葉である。40年という熊本支部の歩みも、視点を変えれば大同小異の道程であったことと推察される。試行錯誤しながらの支部運営と活動の推進、その持続にかけられた歴代の支部長さんをはじめ、支部員一人一人の皆様の献身的で、しかも人並み以上の努力・情熱・愛情の産物であり、喜びの証左にほかならない。改めて、お喜びと敬意を表したい。

-我らが九州代表-

支部活動の一端を伺っても、アルピニズムの実践と、山に抱かれるひたむきな姿勢に多くを学び啓発され範としている。例えば、日本山岳会創立90周年記念マカルー 登山隊員に選ばれたことは、熊本支部のみの名誉にとどまらず「我らが九州代表」と して、大きな喜びと夢をいただき、誇りを味合わせていただいた。

常にオーソドックスな山登りを志向され、実践されている熊本支部の皆さんに、私たちは謙虚に見習いたい。小幅な一歩を重ね、カタツムリにも似た歩みの中に山登りの醍醐味があるとすれば、40年の歴史の中でコツコツと刻まれた伝統の重みは、追騒どころか真似することさえできないことを、しみじみと思い知らされている。

-九州岳人の先達-

宮崎支部の歩みは、今年で13年目。これといった「目玉」を自負するものはない。強いてPRすると、「山里の人たちとの交流で地域活性化貢献による感謝状受賞。ふるさとの山再発見と、みやざき百山刊行予定。月例登山実践と、みやざき百山の集い」などである。支部報も、やっと第2号を発行したという現状である。熊本支部の積極的な活動に刺激されながら、「日向ボケ」の脱皮のアプローチにしたいと考えている。

願わくば、九州背梁山脈の山々を共有する熊本・宮崎支部の更なる交流を深めていただきながら、ご指導下さることを切にお願いしたい。

常に、九州岳人の先輩として活躍されんことを祈念し、熊本支部創立40周年のお 祝いのことばとしたい。



カット:藤本多加志会員

"回顧と展望"

支部長 本 田 誠 也

「回顧と展望」などと大仰な表題を掲げたが、思いつくままに、私と支部との関わり合いや、支部の現況について述べてみたい。私が日本山岳会に入会したのは、昭和37年5月である。福岡の橋本三八さん、佐賀の内野幸男さんに、ご紹介をいただいた。その当時、熊本支部は既に設立(昭和32年)されていたが、三谷支部長に勧められて支部に入会したのは、たしか翌年の秋頃だったと思う。

昭和35年に熊本で第15回国民体育大会が開催され、登山部門は阿蘇山一帯で実 施された。それまで、国体登山は日本山岳会が主管していたが、この年から日山協 (日本山岳協会) に移管された。とは云え、昭和47年(1968年)の第23回大会ま では、全岳連と山岳会両者のブリッジ方式で運営されたという、当時、私は熊本県岳 連の競技役員として、日山協第1回目の国体登山を成功させるため、池崎理事長(現 在、支部会員)を補佐して準備に奔走した。高橋定昌氏の「日本岳連史」によると、 …熊本国体は、日山協として初の国体となり、阿蘇山群を会場に、池崎浩一理事長を 中心に熊本岳連の設営で開催された。大会長武田久吉、委員長高橋定昌、技術委員長 星野重、副委員長羽賀正太郎が務め成功裡に終了した…とある。この時、私はBコー スを担当したが、チーフリーダーは神戸山岳会の前田 浩氏、サブリーダーは肥前山 岳会の内野幸男氏と地元岳連の私であった。この時のご縁で、内野さんから度々日本 山岳会への入会を勧められた。もっとも、日本山岳会への入会は、昭和32年夏、阿 蘇で遭難死された熊本岳連会長の北田正三氏から、生前に私を含め県岳連役員は何度 か勧奨されていた。しかし、夫々山岳会に所属していることや、会費が高いこと、エ リート(大学山岳部出身者)でないと敷居が高いような偏見もあって、結局、誰も入 らなかった。それから6年余、業を煮やした内野さんは、橋本さんと連名の入会申込 **み書を持って熊本に来られた。内野さんの熱意に押し切られた形の入会であったが、** 今となっては感謝のほかはない。熊本支部には、熊本市内の銀丁デパートで、昭和3 7年度支部総会が開かれた折りに、初めて顔を出した。たった8名の集いだったが、 **顱見知り**の人ばかりで、家族的な暖かい雰囲気であった。

熊本支部設立当時から30周年までの経緯については、ただ一人設立時からの会員 **である西沢健**一さん(支部顧問)が、山岳(第73年)及び、熊本支部設立30周年記念 誌に詳しく書いておられるので、重複を避けて、ここでは触れない。

私は今年、満70才になった。中高年の「高」の部に入ったわけである。山岳会に 入会したのは35才の時であったから、支部とは35年のお付き合いということにな る。初代支部長の北田正三先生が阿蘇で遭難死されたのは65才の時であった。昔の 人は早く老成するのか、北田先生は50代に入る前から、北田老、または北田翁と呼 ばれていた。私は昭和33年7月29日、遭難救助ではなく遺体搬出隊長として、1 0 名の仲間と鷲ケ峰の遭難現場に向かった。仙酔峡のキャンプ場で、福岡の高校山岳 部顧問をしていた松本徰夫先生(現・福岡支部長)にお会いした。前日、岩登り訓練 中に現場の確認をされた松本先生に、現場の状況をお聞きした。また、サポートのお 申し出があったので、同行していただくことになった。私は遺体収容のため米軍放出 の背負子と、北田夫人からお預かりした寝袋、香水(ヘリオトロープ)1瓶を携行し た。鷲ケ峰東稜の北側直下で、変わり果てた北田先生と対面した。警察から依頼され た検死(死亡確認)を行い、落下地点の写真を撮るため岩場を探した。小さな光るも のを見つけて摘まみあげると、自然石を三角形に刻んで作ったブローチだった。後で 聞いたところでは、マナスル三次隊の千谷壮之助隊員から送られた、マナスル山頂の 石で作られたものであった。鷲ケ峰北稜基部のトラバースルート(通称 左巻きルー ト)は、松本パーティーによって完璧にフィックスされたザイルを伝って無事通過。 39年後の今、改めてお礼を申し上げたい気持ちである。赤壁で、空中ケーブル(ザ イル)を張っていると、前日、根子岳へ遭難救助に行ったメンバーが不眠不休で駆け 付けて合流した。ジャンダルムから第一キレットのギャップを越えて虎ケ峰に上がる と、そこには、北田先生遭難の知らせを聞いて、九州各地から駆け付けた150名近 い人たちが待機していた。鷲ケ峰東稜から竜尾根への下りは微妙なバランスを要する。 65才の北田先生が、一人で行くルートとしては無理があったのではないか。これは、 私が山岳会に入会する前の出来事である。以下は、この調子で書くと随分長くなりそ うなので、思いつくままをピックアップして並べることにする。

(今西錦司先生との山)大正11年(1922年)の早春、九州旅行の途次、当時20才の今西先生は、友人3人と雲仙岳、阿蘇高岳、久住山に登られた。これが後に日本1500山登頂につながる最初の九州の山であった。戦後、都井岬の野生馬、幸島や高崎山のニホンザル研究を始められた頃、盛んに宮崎、鹿児島や九州中部の山々に登られた。熊本支部と、今西先生との山のお付き合いは、昭和47年(1972年)の八方ヶ岳登山に始まる。この年は32山に登られたが、八方ヶ岳は通算650山目となった。以後、支部の今西先生との山行は、特別例会(1972.1978~1985.10回43山)とし

て、多くの会員が共々に山を楽しんだのである。これは、図らずも支部の活性化をもたらし、東九州、宮崎など他支部との交流の輪を広げた。今西先生は、私どもにとって、まさに「時の氏神」であったのだ。「今西錦司論」は幾つか書かれているが、何れも、この巨人の全体像を書き切ることが出来ないと云っている。私どもは、この偉大な人格に触れることが出来た事を幸せに思っている。

(奥野正亥名誉会員) 平成7年(1995年) 10月14日、日本山岳会創立90周年記念式典席上で、11名の方々に名誉会員章が贈呈された。奥野正亥・前熊本支部長も、その中の一人で支部としても、たいへん名誉なことと喜んでいる。1940年に入会し、会員番号1818番の奥野さんは、既に永年会員になられているが、戦前の北朝鮮の山々での数々のパイオニアワークが、高く評価されたものと思う。

(例会登山と新年晩餐会)始めの頃は、総会を山麓でやって翌日は山に登るというシステムであった。それが昭和63年(1988年)から、事業報告や議案審議に時間がとれない等の理由から、熊本で開催することになった。そして、年間3回の例会は春季(3月)と秋季(9月~11月)が登山例会、夏季(8月)は、夏山報告会を兼ねたビールパーティーとなり定着した。また、新年晩餐会は、昭和55年(1980年)から始めたが、平成6年(1994年)までの14年間は、宮崎豊喜会員がオーナーとなっているレストラン(ホルン山小屋)で開催した。雰囲気もよく、宮崎さんの心のこもったおもてなしもあって好評だった。この40年間に例会等で登った山は、県内が40回、59山。県外が41回、61山、併せると81回、120山となった。この蓄積が今回の「熊本40山」を企画する発端になった。概して会員は、無味乾燥な会議より、お酒と山の話が好きなのか、そんな会合の方が集まりがよかったようである。

(夫婦登山とファミリー登山) 馬場 猛会員は、昭和34年入会以来必ず、千代子夫人(会友)と一緒に例会に参加、或いは会合に出席された。これを見習ったかどうかは知らぬが、その後は、ご夫婦での参加が増えた。即ち、樋口夫妻、大木野夫妻、本田夫妻、そして真打ちが神谷平吉・文子夫婦会員である。これは出席率の向上と、登山の安全対策の面で大きなプラスになった。また最近では田上常務委員がファミリー(寿美子夫人、長男・叡一か6才)で参加、いまや「叡坊」は支部のアイドルになっている。一般的にも中高年者の登山が増加しているので、この傾向は続くものと思われる。ただ最近、病気その他で夫婦登山の参加者が減ってきた。外国では、カップルやファミリーの登山が普通なので、今後は気兼ねなく参加して欲しいものである。

(**生本支部報**)まだ、あまり自慢出来る内容にはなっていないが、平成2年に熊本支 **無報第1号**を出して、7年(第7号)になる。支部報発刊によせて、奥野前支部長は、 次のように述べている。…支部報は云うまでもなく、会や会員相互の交流と情報交換が主な目的ですが、内容が豊富に盛り込まれるには、しばらく時間を要することでしょう。(中略)我々の支部報だと云えるまで、皆で大切に丈夫に育て伸ばして行こうではありませんか。我々の平常の努力の集積と、総べての行動の記録が支部の「わだち」となって残されてゆきます。…全国各支部の中には素晴らしい内容の支部報を出されているところもある。その、よいところを見習って内容の充実に努めたい。しかし充実した内容とは、充実した行動の反映であることを忘れてはならない。

(九州四支部) 昭和49年(1974年) 頃まで、九州の各支部が交流、交歓する機会はなかった。昭和50年(1975年) 日本山岳会創立70周年にあたり、九州で合同祝賀会を開催しようとの機運が盛り上がった。火付け役は、当時実質的な熊本支部長代行の西沢さん(支部顧問) だった。東九州支部、福岡支部の同意を取り付け、福岡の橋本三八さんのご協力を得て「新日鉄九重山荘」に、今西錦司会長、望月達夫副会長らを迎えて盛大に開催された。その後は、今西錦司先生の九州山行を通じて、或いは、夫々の支部の記念集会(JAC80周年、90周年九州ブロック集会 東九州支部20周年、30周年記念集会 宮崎支部86 "九州の集い、10周年記念集会、全国支部懇談会92 "英彦山の集い、etc)に参加して交流を深めてきた。

平成4年7月、福岡支部長の吉村さんの呼びかけで、筋湯温泉・八丁原ビューホテルに九州四支部の代表が集まった。10月末開催予定の、全国支部懇談会(92 "英彦山の集い)への協力要請が主議題だったが、これを機会に、九州四支部合同会議を復活させようという事になった。これをうけて、翌年(平成5年)9月、熊本支部主管で第1回九州四支部合同会議を阿蘇で開催した。以後、各支部の持ち回りで実施されたが、一応一巡したので今回、支部設立40周年記念集会の際、再び阿蘇で開催することになった。歴史的にも九州ブロックは、登る山を共有してきた。長い間、山岳会や登山者の個人レベルでは、交流・交歓がなされてきたのである。そして九州岳連が創設された時代もあった。しかし、「九州は一つ」と云うような強いアピールは、多様な価値観を持つ現代には馴染まない。各支部の情報交換、懇親を主な目的として、今後とも、自由で緩やかな連帯を図りたいものである。

(現状と展望) 私が日本山岳会に入会したのは3 5 才の時である。その当時、高齢者が多い熊本支部の会員としては若い方だった。現在、山岳会員の平均年齢は5 6~5 7 才と聞いているが、熊本支部の平均年齢は6 1 才をこえている。年代別に見ると40代8名、(20%) 50代10名、(24%) 60代15名、(36%) 70代6名、(15%) 80代2名、(5%) となっている。九州各支部の中では、もっとも高齢者の比率が高いのでは

ないかと思う。典型的な中高年グループといってよいが、ある日、突然こうなつたわけではなく、私自身の加齢を含めて、徐々に押し上げられた結果である。グループとしての登山活動は、年齢的な制約から逃れることはできない。しかし、支部会員の多くは若い頃から登山活動を続け、或いは熟年になって再開した、所謂、山歴の豊富な人たちである。山を忘れる事ができず、いや熟年の今からこそ、若い時に果たせなかった夢を実現したいと、プラス志向で精進している人もいる。各人各様な生き方はあるが、支部はお互いの啓発の場としても機能して行きたいと考えている。斎藤会長は、就任のご挨拶で「山登りはそれぞれのパイオニアワーク実践を」と訴えられたが、今後は、会員夫々が自分のパイオニアワークを計画実践する上で、協力し、支援し、励ますことも必要ではないかと考えている。





40年を顧みて

支部顧問 西 沢 健 一

今年、支部は設立40周年を迎えた。これまでに亡くなられた支部会員のご霊前に 心からご冥福をお祈り申し上げる。支部の40年は、山岳会本部の90余年に比べる と、半数にも及ばないが、歳月は知らない間に過ぎ去って行った。それより、設立発 起人の中で、現存者は私一人になっていることの方が、私にはショックであった。

40年も経てば、そうなるものかと、時代の移り変わりの早さに改めて気がついた。 この40年間には、色々なことがあった。今では遠くなり、過去のものとなった。 その中で、心に残るもの、忘れられないものなど幾つかを拾ってみよう。

先ず、支部設立当時のことから。…昔のことを知る人が、だんだん少なくなっていくので…昭和31年(1956年)のこと。この年の7月18日、後に初代支部長になられた北田正三氏が、私の勤務先の熊本県庁に来られて、日本山岳会に入会を勧められた。北田さんとは、昭和23年7月、県岳連の用件で、初めて阿蘇のお宅を訪ねて以来、度々お会いし、ご指導を頂いていた。その頃の私は、専ら県岳連一筋に歩んでいたので、日本山岳会への入会など考えてもみなかった。私でも入会出来るものかと思案したが、その年のマナスル登頂の影響もあり、入会はためらわずに一任した。それから数ヶ月、熊本支部結成に向けて、北田さんの指示、連絡を受け、必要な書類の作成など準備に着手した。

設立承認は、その年の11月21日、本部理事会での決定を見た。別宮会長のときである。発足に当たって、当初は、本部や県岳連の関係者を招いてセレモニーを計画したが、実際には特別なことはしなかった。昭和32年7月13日(土)午後8時、会場となった阿蘇郡一の宮町の北田正三氏宅に、会員9名が集まった。今後の事を話し合うために開いた会合であったが、この日をもって発足の日としている。翌日は、参加者全員で楢尾岳(1331m)に記念登山をした。当時、九州では福岡県下にも支部結成の動きがあっていたが、詳しい情報は得ていなかった。双方が、発足を競っていたわけではないが、相前後した結果となった。こうして熊本支部は発足した。事務局も、当初は、北田支部長の強い要望もあり、県庁登山部内に置いた。(常務委員、西沢)

すべて初めてとあって、日本山岳会の支部として、最初に何をやらねばならないのか、何から手掛けたらよいのか、戸惑いが多かった。こうしたことが、次の課題になった。当時、県岳連の会長でもあった北田支部長の考えの中には、動くのは県岳連(指導機関)があるのだから、支部は会員相互の親睦団体 …当初のうちは… であってよいのだと、支部が一つの家族みたいな考え方があったように伺えた。そこで、会員相互の親睦と協調をはかるため、年2回(春秋)の例会を開くことを申し合わせた。…回数を絞ったのは、支部会員はJAC以外にも、夫々地元山岳会等に所属しており、そちらの活動が主体となることを、考慮してのことであった。…

初代、北田支部長の急死 そんなとき悲しむべきことが起きた。北田支部長の遭難事故である。その頃は、昭和35年開催の熊本国体登山を前にして、県岳連と地元町村が中心になり、計画が練られつつあった。北田支部長は、県岳連会長として陣頭に立ち、国体を成功に導くため、事業は県岳連がやり、サポートしなければならない面は支部でやって行こうと、両者がうまく協調して行くようにと、常々言っておられた。…実際に支部でやることは、何もなかった… この国体登山を前にして事故は起こり、県岳連の人たちも、支部会員も皆一様に大きなショックを受けた。昭和33年7月27日(推定時刻、午後1時半頃)のことである。阿蘇高岳北面、鷲ヶ峰の松ヶ尾谷源頭で転落死された。享年65才であった。支部長在任1年という短い期間であった。生前、大きな夢と抱負を秘められていたと察するが、明らかにされないまま、これからという時に大きな柱を失ってしまった。この悲劇を乗り越えて、私たちは一体となり、熊本国体を成功させた事は言うまでもない。

40年間には、数多くの事業(集会)を行った。昭和60年度から、春秋2回の例会に、夏季例会 …今はビールパーティになっているが… と、新年晩餐会を加えて年4回の定例会となった。この外に何周年記念行事、また九州四支部の合同会など、多くの集会を持ったが、夫々に趣は異なり印象深いものばかりであった。枚挙に暇はないが、その中で一つ、それは日本山岳会創立70周年(昭和50年)の時の事。その頃、九州では福岡、東九州、熊本の三支部が結成されていた。しかし、それまで1度も合同集会を持った事はなかつた。私は日頃から「九州は一つ」と、提唱してきた経緯もあって、この70周年を機会に、合同集会が実現できないものかと考えた。当時、福岡支部の活動が休眠状態であったので、尚更その意向は強かった。先ず東九州支部に、そのことを提案した。…昭和50年7月5日、大分県庄内町黒岳荘で開催された東九州支部総会に出席して提案し、快諾を得た… 更に、同年10月1日、大牟四有明カントリークラブに行き …大牟田市在住の支部会員、馬場猛氏に同行を願っ

た… 福岡支部長に会い、創立記念行事を三支部合同で行うことを提案した。 …休眠状態の福岡支部としては、この回答は重かったと思ったが… 福岡支部長からも快諾され、ここで初めて九州で合同集会の運びとなった。 …九州の会員が一つになり、この集会が先駆けになればと、ひそかに願った… 両支部長のお骨折りで、期日は11月15日、会場は、大分県九重町の新日鉄九重山荘で開催と決まった。本部から今西錦司会長、望月達夫副会長、吉沢一郎氏をお迎えし、福岡(13名)東九州(13名)熊本(17名)合計46名。予想以上の出席があり、皆さんのご協力を得て、終始和やかに支部間の交流が出来た事を喜んでいる。 …司会、進行は熊本支部…そして何よりも、産婆役が果たせたことに意義があったと思った。

支部の休眠 長い40年間には、良いことばかりはない。昭和43年から45年頃にかけて、停滞した時期があった。年2回の例会も滞り、会員も増えず、何かイベントを思っても、少数会員では財源にも限度があり、思い切った方策もないままに年月は流れた。私の力不足、励みが足らなかったことは否めない。

昭和46年に、阿蘇湯の谷温泉で総会を開いた。10名の出席者があり、活気を取り戻すための意見を徴した。良い案は出ないまま、とりあえず例会を再開することにした。その年の11月に、大分県竹田市の首藤会員お世話で、祖母山系の越敷岳に登ることにした。15名の参加者があり、久しぶりに山の霊気に触れ、皆の心の中に活気が戻ってきた。

熊本アルコウ会との接点 これより先に、活気を取り戻す方策の一つとして、会員相互のことだけでなく、広く他団体との関係、また何か目標を持って進むことが、支部の活性化に繋がればと、お互いに話し合うことにした。手始めに、地元の熊本アルコウ会の方々を招いて「語ろう会」を開いた。昭和49年6月18日のことである。放談会の形式で、忌憚のないご意見を期待しての催しであった。色んな放談の中に、良い成果も得られたが、何故か後が続かず…この輪を次々に広げて、次回は県岳連の方々ともなどと考えていたが… 一回きりで終わってしまった。それは、それとして熊本アルコウ会の方々とは、その前(昭和37年2月)にも同会の金峰山の山小屋で、宿泊(19名参加)を共にして親交を深めたことがあり、現在、双方の会に籍を置く会員が多いことも、一因となっている。

今西錦司先生との登山 今西先生と熊本支部との出会いは、昭和47年の八方ヶ岳 (1052m)登山に始まる。以来、昭和60年10月まで、10回に亘り、登った山は43山、参加した会員は延170名に及んだ。地域は熊本県内は勿論、支部のない鹿児島県を含め、福岡県の一部にも及んだ。これだけ続いた今西先生との山行きは、本

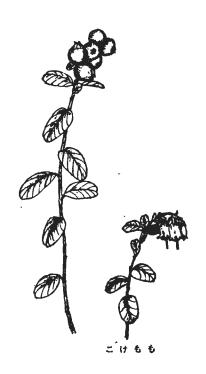
来、支部の定例会ではなく、全く、先生との自由な山行であった。それなのに多くの会員が参加して下さった。東九州、宮崎支部からも、多数の参加があった。先生のお人柄、気さくな性格に魅せられて、参加した者など様々であろうが、皆さん一つになって、山行を楽しく、愉快なものにした。支部にとっても、大きな活力源になったと思う。先生との楽しい思い出は、どなたにも尽きなかったと思うが、その陰には、言い知れぬ裏方さんのご苦労があり、案内する側としては欠かせぬ現地の下見があった。何回も現地に行かれた、そのご苦労があったからこそ、スムーズに運んだ点は見逃せない。それと、私など先生との山行のお陰で、未知の山に登る機会を得て、喜んでいる者の一人である。

最後に、海外登山について。平成4年(1992年)7月18日、福岡空港から、二組 の海外登山隊が日本を後にした。一つは、カナディアンロッキー登山隊(工藤文昭隊 長) 10名と、もう1隊は、ヒマラヤのチョー・オュー/シシャパンマ登山隊(カト マンズクラブ)に参加する馬場博行会員と、サポートの鎹正博会員である。ともに、 支部設立35周年記念事業として、企画したものである。どちらも、海外登山の経験 豊かな隊長を擁しているので、心配はなかった。カナダの山については、中高年でも 登れる山ということで、最終的には工藤隊長の判断で、アサバスカ峰(3492m)と決 まった。結果的には、7月21日に、3360mの鞍部に到達した所で、時間切れとなり 引き返したと聞いた。色んな悪条件、予期せぬ苦労があったと思うが、さぞかし残念 であったろう。一方、ヒマラヤ隊は、経験豊富なグループであったが、それでも、事 前にアンナプルナ山群で、十分に高度順化を行った。その甲斐あって、9月20日、 **馬場隊**員は、チョー・オュー(8201m)の無酸素登頂に成功。続くシシャパンマ(80 13m) は、予想を上回る烈風に遭い、7780mを最高到達点として下山した。二つの登 山隊とも、無事に帰国したが、隊員は夫々に、貴重な体験をされたと思う。余談だが、 チョー・オュー登頂の馬場博行会員は、昭和63年(1988年)のチョモランマ/サガ ルマータ三国友好登山隊に、参加した経歴の持主である。本人の豊富うヒマラヤ経験 と、人柄の良さ…ヒマラヤでは特に人間関係…により、本部の選考委員会で選ばれた **ものであ**る。私との出会いは、昭和60年4月に溯る。支部委員会の席上で、本田委 **員、大木野委員から紹介された。三国友好登山隊に是非、参加したいとのことであっ** ▶ 会員ではないので、どうすれば良いかとのことであった。話をしてみると、どう **しても参加**したいという強い意志が伺われた。相談を受けた私には、即答出来ないの 一両日後、二人で上京した。本部で予細を承ると、隊員の選考は本部が行うので、 **早く申込書を**提出するように言われた。確か、締切り期限が、間近かに迫っていたよ

うに覚えている。私は二つの事を賭けた。一つは、馬場君自身にとって、強固な(ヒマラヤのことになると、頑固さがある)希望、願いが叶えられることであれば、惜しみなく援助してみたかった。

いま一つは、九州からも、隊員を送り出したい一念である。馬場君の出現は、それにピッタリであった。熊本支部は勿論、九州の会員にとっても、大きな励みとなり、 転機となって、彼の後に続くものが出てくるであろう。私はひそかに期待をかけ、微力ながら、彼を支援することにした。今は、後進の指導、また、支部の運営にも、新風を吹き込んで欲しいと期待している。

終わりに、40年も前のことになれば、もう昔話。忘れてしまっていい。昔のことを書くのは、これ切りにしたい。それは、支部が大きく様変わりしているから。今の成長へと変えてくれたのは、支部の皆さん方である。そして、次の成長へと、ステップを進めよう。





我が内なるアルピニストの魂

馬場博行

-なぜ山に登るのかー エベレストに逝った、イギリスの登山家マロリーは、羽音をたてて群がる蚊のような記者団の、哲学めいた質問に、「山がそこにあるから」と名言を吐いた言葉は有名になった。果たしてマロリーは真面目に答えたのだろうか。

例えば、「何故、人は生きるのか」と言う問いに、「食べるために…」という答えは正しくない。なぜなら、食べる事は生きるための手段であって、「なぜ生きるのか」と言う問いには答えていないからである。これから、舌足らずのマロリーの真意を、勝手に代弁させてほしい。「なぜ山に登るのか」と聞かれたら、僕は間違いなく「困難や死の危険があるから」と答えるだろう。ここで言う困難や死という概念は、飽くまでも個人的レベル差によって応じる、内面的な精神作用の事である。つまり、内面的な精神作用から、沸き上がる恐怖感を克服しながら、新しい道を切り拓いて頂上に向かう時、大きな満足感に満たされる。即ち、登山とは人間が本来持っている純粋な、本能的な、生への可能性の追求である。僕達は長い間、日常の決まり切った時間と空間の中で過ごしていると、自分で気付かない内に、社会意識という巨大な波に飲み込まれ、個としての自立した自分の存在を見失い、さらには万物の多くの力の上に、自己が成り立っていることを忘れてしまう。しかし、ひとたび大自然の偉大な力に触れると、他愛もなく、傲慢な自己は打ちのめされるだろう。大自然との接触は、個である本来の自己を目覚めさせる、いい、チャンスになるのだ。

一山との出会いー 20代初めの頃の僕は、少しばかり人とは変わっていた。人生
の意味と目的について、哲学的な思索に更ける事が多かった。しかし、何の解答も得
られず、時間は心とは裏腹に、平凡な日々を刻み続けた。ついに僕は社会への絶望感
と、コンプレックスの頂点に達し、入院する破目になった。僕はすっかり自己嫌悪に
●り、自信を失くしていた。そんな或る日、職場の山好きな友が、僕を山に誘ってく
れた。早速、登山用具点に出かけ、山靴やザックを買った。その夜は、初めて玩具を
●った子供のように、嬉しくて、なかなか寝つけなかった。待ちに待った、山行の日
●やってきた。緑に包まれた美しい山々の、澄み切った渓谷のせせらぎでキャンプを

楽しむ週末が続いた。だが、それだけでは、僕の若いエネルギーは満足出来なくなっていた。岩登りをしない友とは、山行回数が減少した。烈しい行動と緊張の中に、幾らかの幸福と忘却を見出そうと、岩登りに傾倒していった。毎週、休日ともなれば、スリルと興奮を求めて、九州の岩場を徘徊し、本格的なクライミングの技術を習得していった。いつしか僕は、北アルプスの第一級の岩壁を、トップでこなすまでになり、山への激しい情熱は、次第に厳しい冬の岩壁へと憧れていった。

- **魔の氷壁を登る**- 北アルプスでのデビューは、鹿島槍ヶ岳北壁中央ルンゼの、 積雪期の登攀であった。中央ルンゼは、北壁の中央岩壁を、真っ二つに割った間にで きた落差500m~600mにも及ぶ、日本でも最長の氷瀑である。積雪期の初登は、悪戦 苦闘の末、吉尾 弘氏ら3人のパーティーによってなされていた。僕のザイルパート ナーは、長野県大町市で初めて顔を合わせた三浦氏だった。彼は金沢市出身の先鋭的 なアルピニストの一人で、無駄のない引き締まった体形から、気鋭のアルピニストと しての自信が漂っていた。年齢は僕より一つ上の23歳だった。僕は或る知人から、 積雪期の鹿島槍の、北壁中央ルンゼを狙っている男がいると聞いて、早速、電話で連 絡をとり、「一緒にやろう」という事になった。…僕らは、天狗尾根の雪洞を朝暗い うちに出発し、雪崩の危険を冒して、カクネ里へトラバース気味に下降した。カクネ 里の底は予想通り雪が深く、腰まで潜るラッセルで、北壁の基部に達するのに可なり の時間を要した。ルンゼ内を覗き込むと、不気味に光る真っ青な氷瀑の上からチリ雪 崩が流れ落ち、登攀意欲を萎えさせた。その日は、氷瀑の3分の1を登り厳しいビバ ークとなった。翌朝、氷瀑は登るにつれて傾斜を増し、体は常に死の空間に曝されて いた。ルンゼの出口は最悪だった。今でも、登れたのが信じられないほどだ。初登時 のパーティは、この最後の壁をボルトとピトンの連打でぬけている。しかし僕たちは、 厚さ3字の氷と雪の付着で、それらのピトン一本さえ発見できなかった。暫くは途方 に暮れたが、三浦がトップで登り出した。薄い氷に強引にアイスバイルを打ち込んで 登る。いつ氷が割れて落ちてきても、不思議ではなかった。僕は緊張しきって、祈る ような気持ちで確保を続けた。突然、アイスバイルはフィンガー部分からポッキリ折 れて、三浦は墜落し、辛うじて一本の確保用ピトンに支えられてぶら下がった。もし、 このピトンが抜けていたらと思うと、背筋が凍った。下降することは不可能だった。

二人が生還するには、どうしても、この難場を登らなければならない。僕はトップを三浦と交替し、まさに薄氷を踏み思いで、アクロバットのような登攀を続けた。ルンゼの出口は、無慈悲にも巨大な茸雪がのしかかり、嘲笑っている。一本のランニングビレイもなく僕は登り続けた。緊張しきった心臓は、今にも張り裂けそうだった。

登攀の限界に達しようとした、その時、ルンゼの出口の凍てついたブッシュを掴んで救われた。頭上にのしかかった茸雪を削り取り、ルンゼから這い出した時は、九死に一生を得た思いで嬉しかった。頂上までは、雪の急斜面が続いたが一息だった。こうして二人の念願だった、積雪期中央ルンゼの第3登に成功した。山頂で、氷の破片で傷ついた顔を見合わせ握手をかわした時は、もう何十年も付き合って来た仲間のようになっていた。

-二つの遭難事件- 僕が、21歳の時、今から考えると気違いじみた常識外れの 山行だった。台風の真っ只中、地獄谷に切れ落ちる阿蘇根子岳南壁の大ハングルート の登攀を決行したのである。某山岳会リーダーのM氏を誘い、車で阿蘇に向かう。ラ ジオは台風の接近を、時々刻々と知らせていた。時折り、強い風雨が窓を打つ宮地駅 の待合室で夜を明かす。朝、嵐の前触れを思わせるような厚い雨雲が、全天を覆って いた。不安気なM氏は、登山を中止したいと言う。何とか説得しようとしたが、応じ てくれず、やむを得ず引き返すことにした。僕は、この嵐の中で登攀する理由を持っ ていた。「より高く、より困難を目指す」事こそが、アルピニズムの実践であり、真 **のアルピニストであると確信していた。この台風の真っ只中に岩壁を登攀することは、** アルピニストとしての強い意志を培う、絶好のチャンスだと考えたのだ。熊本市の独 **身寮**に帰った僕は、諦めきれずに同じ山岳会に所属する、 I 君に電話をかけた。 I 君 **は驚**いて、今日の午後からは暴風圏内に入るから、とても登れないと言う。しかし、 僕は、アルピニズムに対する信念と理論で、何とか彼を口説き落とした。南壁の大ハ ングルートに取り付いた時は、既に正午をまわっており、叩きつけるような風雨の中 **を登り出した。 3 ピッチ目の大ハング下にさしかかる頃は、風雨は一段と激しさを増** し、ハングに掛けたアブミは宙を舞った。おまけにザイルはたっぷり雨を吸い込み、 岩角の摩擦で異常に重くなってきた。9月下旬だというのに、風雨に体温を奪われ寒 **≺な**った。ホールドを掴んだ手は痺れて、次第に感覚を失っていった。必死になって **ザイル**を操作し、バランスを保ったが苦しい登攀になった。まるで地獄に落ちたガキ ●ように、ハングを乗り越え垂壁にへばりついた。Ⅰ君に、もっとザイルを出してく **れるよ**う叫んだが、声は嵐にかき消されて届かない。緊張で唾液が喉に張り付き、口 **はカラ**カラだった。長い苦闘の末、やっと南壁を脱出して、天狗岩の鎖場に辿りつい **♪時は**、もう闇が迫っていた。声が届かないⅠ君に、ザイルを引っ張って登攀終了を ■らせる。やがて、ザイルの動きで、Ⅰ君が登り出したのが解った。暫くすると、ザ **彎ルは止まったまま動かなくなった。ハングの乗っ越しで苦労しているのが、ザイル ■■して伝わってくる。僕は声を限りにエールを送った。そのとき、ザイルがガクン**

と肩に食い込んだ。不吉な予感が頭を掠めた。夜の闇の中、風雨は地獄谷の木々を押 し曲げて荒れ狂う。案の定、I君は力尽きてハングの下で宙吊りになっていた。僕の 頭は混乱した。手繰り寄せたザイルをできる限り降ろし、その先端を鎖場に固定した。 そして、彼を救出するため、ブッシュをかき分けて地獄谷へ下降した。蛍の光のよう なヘッドランプは、真っ暗闇の暴風雨の中では、全く役にたたなかった。一刻も早く 何とかしなければと、気ばかり焦るが為す術はなかった。いますぐ救出できればよい が、もう僕一人の力では、どうしようもなかった。このままでは、彼は死んでしまう だろう。何時間もかかって救助を求めに下るのは、彼を見殺しにすることだった。そ うこうしている内に、時間はどんどん過ぎて行く。僕はとんでもない間違いを犯した 事を悔いた。「僕は自分のエゴのため、友を殺したのだ!」済まない、済まない、僕 が戻ってくるまで、生きていてくれ! 自責の念にかられ、真っ暗な山道を無我夢中 で走った。地獄のような嵐の中で、友がもがき苦しんでいると思うと心が痛んだ。走 りに走って、山麓の一の宮警察署に駆け込んだ。早速、山岳救助隊員が召集された。 しかし、この闇と風雨の中では出動は見合わせられ、翌早朝、日の出と共に救助活動 は開始された。地獄谷は深い霧に閉ざされて、静寂を取り戻していた。僕は、天狗の 鎖場から身を乗り出して、大声で彼の名を呼んだ。本当は、彼の名を叫ぶのが、とて も怖かった。祈るような気持ちだった。僕の叫んだエコーが消えて暫くすると、何と、 彼の弱々しい声が聞こえてくるではないか。一瞬、僕は自分の耳を疑った。「生きて いる!」救助隊の間から、どよめきの声が上がった。彼は生きている、僕は何回も、 何回も、コールした。彼は本当に生きていたのだ。有り難う、本当に有り難う。

I 君は後に、こう述懐している。「オーバーハングで、強風に舞い上がるアプミを引き摺り降ろそうとしたが、力尽きた。暫くは宙吊り状態になっていたが、ザイルが徐々に降ろされ、下のテラスに足が届きそうな所で止まった。胸がゼルプストに締めつけられて苦しく、背負っていたザックを地獄谷に放り投げた。それでも、胸は圧迫されて苦しく、ザイルを切ろうと思ったが、ナイフは投げ捨てたザックの中だった。イチカバチカで振り子をしている内に、小さなテラスに足が着いた。助かった!と、ホッとしたが、災いしたハングが庇となって、風雨から或る程度、身を守ることが出来たのも幸いだった。」しかし、この事件後、彼は2度と山に登ることはなかった。

そして僕は、所属する山岳会から1年間の謹慎処分(山行禁止)を申し渡された。 だが数ヵ月後、謹慎を破り、とうとう除名処分になってしまった。ある山岳会のスポークスマンは、皮肉たっぷりに断言した。「あいつは、30歳までには山で死ぬだろう」と。山岳会を除名された僕は、新しいパートナーが必要だった。それで、某山岳 会の鹿島槍ヶ岳の登山合宿に参加した。…天狗尾根で、僕は先頭に立ってラッセルを **続け**ていた。後から声がかかり、交替することになった。後続の3人が近寄り、交替 しようとした瞬間、鈍い音をたてて、大きく張り出した雪庇が崩れ、二人がアッとい う間に、カクネ里側に吹っ飛んで落ちていった。一瞬何が起こったか解らず、呆気に とられて立ち尽くしていた。すると、「助けて!!」という叫びに、ふと我に帰った。 見ると、もう一人が必死になってブッシュにぶら下がっていた。僕は慌てて駆け寄り、 彼の腕を掴もうとしたが、力尽きた彼は悲鳴を残して、深い谷底に落ちていった。そ **の**時の彼の哀願するような悲哀に満ちた顔を、今でも忘れることは出来ない。目を凝 らして滑落した後を追うと、深い、真っ白な谷底に、針で突いたような黒い点が三つ 見えるではないか。それは、間違いなく滑落していった3人の姿だった。それを見た 瞬間、僕の体を電流が駆け巡った。全身はカッと燃え上がり、雷鳴が僕の感情を直撃 した。その時、僕は別人となり、怒り狂った阿修羅のごとく、一切の危険を顧みず、 **燃料と食料を持って、急峻な雪の斜面を駆け降りていった。最後は10なほどの雪壁** となっていたが、ためらわず飛び降りた。全身はスッポリと深雪に埋没したが、泳ぐ ようにして彼らの側に近ずいた。3人が生きていたのは奇蹟だった。恐らく、深い雪 が幸いしたものと思われた。小さな雪洞を二つ掘って収容した。僕は一晩中、必死に トランシーバーでSOSを叫び続けた。それを大町市のハムがキャッチしてくれた。 翌日は運よく天候に恵まれ、早速、ヘリが飛んできた。周りを、何回も旋回し、やが **て僕ら**の頭上に静止した。物凄い雪煙を吹き散らしながら、一本のロープが降ろされ 一人づつ吊り上げられた。そして、ヘリはアッという間に大町まで僕らを運んでくれ た。僕を除き、病院での診断結果は次の通りだった。(男性A)両足膝粉砕骨折。 (男性B) 右肩関節脱臼。(女性A) 顔面裂傷及び重度の肺炎。この事故の原因は、 ラッセルを交替した時、大きく張り出した雪庇側に廻りこんでしまったために起きた

もので、僕らの雪に対する知識の欠如が最大の原因であった。

ーヒマラヤへー 僕のヒマラヤ登山が現実となったのは、25歳の時である。49 霾になった現在まで、海外遠征は18回となったが、その内、14回がヒマラヤであ **る。**ヒマラヤ登山の難しさは、山行以前にある。そして、多くの人々の力によって支 えられていることも、忘れてはならない。大きな登山になれば、計画から出発まで、 **墨低**1年はかかる。余程の情熱と努力がなければ、途中で挫折してしまう。1988 年、幸運にも、日本山岳会の全力をあげて実施された、日本・中国・ネパール3国友 **騒チ**ョモランマ/サガルマタ登山隊に、参加することが出来た。日本の第一線で活躍 する岳人と共に8000なを超す死の領域の中で、希薄な空気と闘い、自己犠牲をかえり

みず、一つの目標に向かって邁進したことは、生涯忘れられない思い出となった。

また、1992年には、カトマンズ・クラブの仲間と、チョーオューとシシャパンマの二つの8000 旋峰を目指した。シシャパンマでは、想像を絶する烈風のため、山頂直下の7850 粒で断念したが、チョーオューでは快晴に恵まれ、無酸素で登頂することが出来た。これも、また、職場や家族や色々な方々の、理解と協力なしには、出来なかったことである。

-君はクビだ!!- しかし、このように遠征計画が、いつもうまくゆくとは限ら ない。1986年は、実に悲惨な結末を迎えた。前年、1985年の冬期マカルー登 山は強風のため、7500粒の北西稜上で敗退した。その雪辱戦として、マカルーとバル ンツェの冬期単独登頂を目指して、着々と準備を進めていた。本当のことを云えば最 初は単独ではなく、パーティーを組んで行く筈だった。一緒に、この計画を実現する パートナーを探したが、見付からなかった。だが僕には、長い間の念願だった、この 計画を中止することは出来なかった。一人でもやろうと決意した。しかし、一人だと 資金繰りが苦しい。なけなしの金を全部掻き集めても不足する。あとは借金に頼る外 はなかった。ともあれ準備は整い、装備、食料を4個のカートンボックスに納め、無 事カトマンズへ発送した。残るは、約三ヵ月に亘る長期休暇の問題だけだった。有給 休暇を全部足しても、あと一ヵ月が不足した。勤務先の電話局長に泣きついて頼めば 何とかなるだろうと思ったが、考えが甘かったようだ。返事は貰えず完全に無視され た。打開の道はないままに、計画実行の日がやってきた。僕は、各関係のトップ宛に、 3通の手紙を投函して熊本空港に向かった。手紙には大体、次のようなことを書いた、 「身勝手ではありますが、この計画を実行するためには、有給休暇とは別に約一ヵ月 が不足します。もし、お認めいただけなければ、如何ような処分でも甘んじて受けま す…」。例え、どのような処分を受けても、僕は、この計画を実行したかった。中止 することは、僕のアルピニストとしての信念に、もとることになると考えた。

熊本空港で成田行きの便を待っていると、空港職員が僕を探しに来て、電話がかかっているので至急、公衆電話に出るようと告げた。受話器を取ると、ナ、ナント!僕の相談を無視した局長の声だった。「君! 君は一体何を考えとるんだ!」激怒のあまり、声はうわずり、一方的にまくしたてられた。僕の鼓膜はガンガン鳴り、破れそうだった。やっと僕は言った。「もう、後に引くことはできません。行かせて下さい」。

局長は、その言葉を遮って、「君! 君は自分が何をしようとしているのか解っとるのか」。僕はこれ以上、話をしても無駄だと悟った。烈火の如く怒り狂って、機関銃を乱射するような局長の声を遮り、「済みません、行かせて下さい…」と、一言い

って受話器を置いた。成田へ向かう機内で、僕の心は動揺し、憂鬱だった。「もう、 この計画は中止出来ないんだ」と、自分に言い聞かせた。成田で慌ただしく出国の準 備をしていると、僕の名前を呼びながら、トランシーバーを片手に持った女性が走り 寄ってきた。僕が返事すると、そこの公衆電話に出て下さいと云う。不吉な予感が胸 をよぎった。受話器を取ると、やっぱり、あの忌まわしい局長の声だった。もう僕は ウンザリだった。「君! 休暇なんか絶対認めんぞ、解ったか」。僕は返す言葉もな く、ただ黙ったままで聞いていた。「君! 君は首だァ!」、「解りました」と、ポ ツリと言った。「いや、君は解っとらん。首ということは、退職金が出ないんだ!解 っとるんかね。それでもいいんだね」と、感情むき出しで念を押した。この脅し文句 に僕の胸は短剣が突き刺さったように疼いた。もう、こうなったら怯むどころか、自 棄のヤンパチだった。例え、どんなにひ弱な動物だって、徹底的に追い詰められると、 最後は自分を守るために牙を剥くのだ。「局長! 局長の好きなようにして下さい」 と、吐き捨てるように言った。すると、局長の声は一変した。か細く、哀願するよう な声で、「頼む、引き返してくれ」。僕は無視して電話を切った。執拗に僕を押しと どめようとする理由が、ここにきて、はじめて解った。きっと、上部からの圧力がか かって、局長自身、進退極まっているのに違いない。彼からすれば、僕はダイナマイ トなのだ。こんな不良社員を持って、さぞや恨めしかっただろう。しかし、僕を行か せるも行かせないも、局長の判断一つで決定できた筈だ。それなら、こういう事態に なる前に、もっと僕の相談を無視せず、聞いてくれればよかったのだ。暫くするとま た、電話がかかって来た。受話器を取ると、何と女房の声だった。僕はアッパーカッ トを喰った思いだった。なぜ女房が電話してきたのか、サッパリ解らなかった。しか し、女房の声はすこぶる落ち着いていた。「一度帰って来て下さい」。「僕を引き止 めるのか」と、尋ねると、「いや、引き止めません。一度帰って辞表を書いて行けば、 誰にも迷惑がかからないし、貴方だって気持ちよく出発できるでしょう。…今しがた 局長さんから電話がかかって、私も散々叱られたのよ。」泣き出しそうな声に変わっ た。空港内には、カトマンズ行きのアナウンスが流れ、出国ゲートの前は、もう最後 尾の人たち数人になっている。僕は決断を迫られた。すぐ目の前のゲートを、目をつ **ぶ**ってくぐれば、この計画は実行出来る筈だった。しかし、僕の心は女房の電話で痛 んでいた。もうクタクタだった。僕のクーデターは、女房の電話で未遂に終わった。 **熊本**空港に着くと女房の姿があった。僕は心身共に疲れ果て、重い足を引き摺りなが **ら無**言のままで車に乗った。駐車場の方から、満面に笑みを湛えながら、局長が近寄 ってきた。我が家に帰ると、暫くは放心状態のままだった。幼い三人の子供たちを見

ると、辞表は、ついに書けなかった。一週間後、送っていた荷物を整理するため、カトマンズに飛んだ。ネパール観光省の登山局で、登山を断念しなければならない事情を説明したが、すでに払い込んでいた登山料80万円は、ついに返らなかった。借金だけが残った登山に終わってしまった。孔子曰く、「その食をはむ者、その難を避け得ず」だろうか。いや、参った、参った。ガハハハハ…

-**ヒマラヤでの神秘体験**- 1983年のヒマラヤ遠征は、僕の人生を一変する、 スピリチャルな体験だった。何と一秒という瞬間の中に、永遠ともいうべき時間と空 間が存在したのだ。意識下、つまり意識さえも意識出来ない意識が、我々の心の中に 眠っている。仏教の用語を借りていえば、唯識論に出てくる、人間の根底を支えてい る「阿頼邪識」とでも言ったらよかろう。人間は、生と死の間をさ迷う時、このよう な意識が突然現れ、全人生が顧みられる。そして、魂は永遠なる世界へと、旅を続け て行く。1983年12月20日の午前6時、カングルー(7010気)の麓に陣取った ベースキャンプ (3500な) から、単独で頂上を目指した。ザックの中は、予備を含め て四日分の食料と装備で焼く15キロの重さだった。冬期に一人で、未知の7000気峰 の登頂を目指す、私にとっては大いなる冒険への旅立ちだった。緊張と期待に胸は高 鳴っていた。4300粒の雪のプラトーを行く頃、風に小雪が舞い視界が閉ざされた。上 空には、厚い灰色の雲が重くのしかかっていたが、天候は回復の兆しを見せていた。 上部から押し出された急峻なアイスフォールを避け、雪と氷の混じった岩稜を登る。 岩稜の上は、また雪のプラトーが続く。雪原は浜辺に打ち寄せる波を、一瞬のうちに 凍結させたような氷で、ささくれだって歩きづらい。あたり一面に大小様々な水晶の 魂が散らばっている。手に取ってみると、何とそれは、つるつるに磨かれた氷の魂だ った。すでに太陽は、アンナプルナ山群に沈みかけようとしていた。アンナプルナ□ 峰の冷たく青く輝く氷の襞は、一気に数千メートルも下まで切れ落ち、黒い影をのば しながら消えている。それは、あたかも人間の挑戦を拒んでいるかのように見えた。 一方、それとは対照的に、カングルーの静がに横たわる巨大な山体は、残光を浴びて 朱色に染まり眩しく輝いている。遠い昔から言い伝えられているように、ヒマラヤの 峰々は、神々の座する所だった。すると突然、信じ難いような事が起こった。大気が、 キラキラと虹色に輝き始めたのだ。よく見ると、ガラスを砕いたような無数の破片が、 太陽の光を反射しているのだ。疲労と高所の影響で頭がおかしくなったのだろうか、 「まさか!」と、目を擦り、頭を叩いて我に返ろうとしたが、現実の世界だった。陽 が沈むと気温は急激に下がり、吐く息で濡れた鼻ひげはバリバリに凍りつき、ツララ のようにぶら下がった。静寂な夜の帳が下りると、満月の光は雪原を照らし、幻想的

な世界へと変えていった。ベースキャンプを出発してから、もう既に十四時間を過ぎ ているのに、全く疲労感と空腹感がなく奇妙にさえ思われた。高度計を覗きこむのに、 キャップランプは必要なかった。満月の光は高度計の針が6500気付近で止まっている のを見せていた。その途端、突然、目の前が真っ暗になった。何が何だか解らないが、 頭の中で過去の記憶が、猛烈な勢いで回転しだしたのだ。小さな頃から現在までの取 り留めもない記憶が、パラパラと本を捲るように思い出されてくるのである。螺旋状 のトンネルの中を、猛スピードで飛び抜けたかと思うと、いきなり真っ暗な広い空間 に放り出された。目を凝らすと、星を散り嵌めたような無数の光が輝いている。僕は 気の遠くなるような過去に向かって、際限もなく飛び続けている自分を感じた。「一 体自分はどうなっているんだろう、何処へ行こうとしてるのだろう」と、ボンヤリ考 えていた。恐怖は全くなかった。しかし、得体の知れない大きな力の存在を感じた。 この、何時尽きるか解らない時空から、どうしたら脱出できるのか、ただジット自分 の運命を見守る外はなかった。ふと、気がつくと、エメラルド・グリーンの光輝く美 しいクリスタル宮殿の中にいた。遙かな時空を超えて、とうとう異次元の世界に、足 を踏み入れたのだと思った。時間がたつにつれ、少しずつ解ってきた事は、幅80秒 程のクレバスに落ちて、5~6 気下の氷の突起に辛うじて引っ掛かり、身体が「く」 の字に折れ曲がっていたのだ。まさに奇跡が起こっていた。宙に浮いた足下には、月 の光も届かない真っ暗な空間がポッカリロを開けていた。下手に身体を動かせば、そ のまま落ちてしまうだろう。絶望と、恐怖と、緊張の時が過ぎて行く。自分の愛する 三人の子供や、妻のこと。ベースキャンプで帰りを待つ仲間のこと。そんなことを思 うと、胸が締めつけられるようで悲しかった。どんなに泣き叫ぼうと、誰も助けては くれない。いや、こんな状態にある事を誰も知らないのだ。とくに、家族と二度と会 えなくなると思うと、耐えられない悔しさがこみ上げてきた。逆巻く荒波の中を漂う 木片に、しがみつくような気持ちで神に祈った。…僕は、このままでは絶対に死にた くなかった。子供たちや妻に、話して置きたい事が山ほどあるからだ。「好きな事を して死ねれば、本望ではないか」と、いうような無責任な言葉を許す事は出来ない。 それは、無関係な他人の戯言だ。とにかく、自分の力で脱出する以外に道はない。氷 壁に、背中と両手両足を思い切り突っ張って、息を殺しながらじりじりと身体を押し 上げていった。どの位、時間が経ったのだろう。やっとの事でクレバスから脱出した。 全身から見る間に力が抜けてゆき、放心状態のまま、両手をしっかり組んで雪原に蹲 った。涙がとめどもなく頬を伝わって流れ落ちた。「神様ありがとう」、口をついて 出てくる言葉は、ただそれだけだった。母体から生まれおちた胎児のように、僕は

「生命の光」を全身に感じていた。この事件は僕の人生への考えを一変させた。この奇跡的な体験、つまり生か死かという極限の体験をしなかったら、恐らく僕は、闇の中の世界に閉ざされたまま、何も知らずに一生を終えたかも知れない。諸行無常、形ある物は壊れ、生ある者はいつか死んで行く。僕が、平均寿命の80年を生きるとすれば、もう三分の二は過ぎている。富と名声、権力と支配、そして快楽。そんなものが何になろう。そのような欲望のために人々は殺し合い、傷つけ合い、罵り合う。そして、短く儚い一生を終える。僕に必要な事は、正しく物を見る目と、自己の探求である。それこそが「生きる人」にとって、最上の喜びと幸せであることを悟った。人は逆境にたって悲しむ事はない。逆境にたって苦悩することは必要な事だ。それは人生について学ぶ事であり、自己の完成に向けての肥料になるものだから… 人間の幸せは、決して物質文明の豊かさや、科学技術の発展だけによってもたらされているのではない。"心の平和"があって、始めて人間は本当の癒しを味合うのだ。

僕のスピリチャルな体験は、神が与えた大きな試練だったに違いない。僕が、クレバスに落ちて行く瞬間に見た、あの膨大な過去の記憶。何百年、何千年もの時が流れ去っていった、あの出来事を、どのように解釈したらよいのだろう。見る、聞く、嗅ぐ、味合う、触れる、この五感は、表層にのぼってくる意識である。この意識は、あらゆる環境の中で、生きとし生けるものが、生活を営む上で必要な意識である。しかし、僕のスピリチャルな体験は、そんな意識ではなかったのだ。日常の生活では知覚できない、この意識の下には、一瞬という永遠がある。一瞬の中には永遠へ続く時空が存在するのである。20世紀最大の哲学的天才、ヴィットゲン・シュタインは、

「論理哲学論考」の中で次のように述べている。「死は人生の出来事ではない。人は 死を体験しない。永遠とは時間の限り無い持続ではなく、無時間の事であるとすれば、 現在に生きるものは、永遠に生きる。我々の視野に限りがないように、また、我々の 生にも終わりがない」。僕が垣間見た、あの一瞬の出来事は、永遠に目的地に着くこ とのない、魂の旅の途中だったのであろう。

れそうに痛い。時計の針は恨めしいほど、ゆっくりと進む。バリバリに凍ったツエル トから顔を出すと、すでに月は落ち無数の星がきらめいていた。眠れぬままに、こう して一人ぼっちで氷のテラスに座っていることが、妙に不思議に思えてならなかった。 今頃、三人の子供と妻は、どんな夜を迎えているのだろう、などと考えたりした。気 の遠くなるような残酷な夜は長く辛かった。東の地平線が、うっすらとオレンジ色に 輝き出した時はホッとした。素晴らしい夜明けと共に僕は頂上への一歩を踏み出した。 羹しい氷壁に突き当たると、その度に呼吸を整え自分を落ちつかせた。ここには、自 分を確保する一本のザイルもない。アイゼンのツアッケが、やっと食い込む固い氷の 上ではバランスをとるのが難しい。一寸でも恐怖感に襲われると、足は一歩も前に出 ない。厳しい大自然との闘いではなく、自分の理性を冷静に保つことが必要だった。 長い氷の大斜面を乗っ越し西稜の上に出た。烈風が頬を打ち、ラクダの瘤のような突 起を、いくつも越えて登り続けた。最後のナイフエッジを登りきると、ついに頂上に **達した。**頂上は広い雪のドームだった。強風に煽られながら、ぐるりと見渡した。眼 下に広がる茶褐色のチベット高原が懐かしかった。一人ではなく、感激を分かち合う パートナーがいたら、どんなに素晴らしかっただろう。風が強く僅か10分で切り上 げたが、それで十分だった。僕にとって、頂上からの眺めが目的ではない。これまで **持ち**続けていた、アルパイン・スタイルの理論を実践することにあった。僕にとって ●頂上は、その折り返し点に過ぎなかった。しかし、問題はまだ残されていた。安全 **に下**る道はただ一つ、登って来たルートを確実に下る事だった。ところが困った事に、 ★中で何度もルートを見失ってしまった。何しろクラストした氷雪には僅かなアイゼ ンの爪跡しか残っていないのだ。西稜を下っていると、後ろから「そっちじゃない、 そっちじゃない…」と、不思議な声がかかる。ハッとして我に返ると、ルートを逸れ ているのに気づく。目を皿のようにして、僅かに残されたアイゼンの爪跡を探す。誰 **♪が**背後にいる。はっきりと僕は、その気配を感じている。しかし、何べんとなく振 **り返**っても、誰もいないのだ。疲れで幻覚症状が出たのだろうか。いや、そんな筈は **☎い。実際に後ろから呼びかける声がなかったら、僕は、とんでもない方向に行って ■♪たか**も知れない。西稜から、傾斜度45度の氷壁を下降し、やっと雪原に達した。 **しか**しカングルーは、そう安々とは僕を帰してはくれなかった。突然、片足を踏み抜 **ぬたか**と思った瞬間、鈍い音をたてて雪原に亀裂が走った。僕は反射的に、もんどり **うって前に転がった。振り向くと、何とヒドンクレバスが不気味に口を開けている。** は、またも命拾いをしたのだった。その日は、5300なの氷河の窪みでビバーク **する破**目になった。翌朝、二度のビバークでフラフラになって、ベースキャンプにた

どり着いた。皆は一瞬、僕の姿を見て喜ぶどころか、戸惑った様子だった。生きているのが信じられない、と驚いているのだった。実は昨日、僕の行動を双眼鏡で追っていた隊員の誤認で、僕がクレバスに落ちたと告げていたのである。単独行動でクレバスに落ちることは、死を意味する。それで、ベーズキャンプは、重たい空気に沈んでいたのである。

- 自然の中の自分- 大多数の人々は、仕事や家庭、そして趣味や娯楽に心の寄り どころを求めて、安住したいと考える。僕の若い頃の、とくに20歳代の頃の登山は、 社会への絶望感とコンプレックスから山に飛び込んだ。荒々しい自然と対決する事に よって自己を主張し全てを忘れ、心の安らぎを得ようと考えた。しかし、現在では幾 多の困難な登山を重ねる毎に、大自然の偉大な力の前に、無の力を知った。大自然と 接する営みの中から、多くの事を学び取る事ができた。生と死の境界に立たされた時、 人は生きるために最高の力を発揮する。その力は尊厳にして、普遍的なものである。 これからも体力の続く限り山を愛し、大自然の中で自分自身と闘い、真実の自己を発 見したいと考えている。要は、山に登って何を得るかが問題だ。自分の内なる心を極 めることは、ヒマラヤの山々に登ることより難しい。若し僕が、あのとき山に出会っ ていなければ、今頃は何をしていただろう。恐らくは、きっと現実の社会意識に染ま った、出世第一主義の道をまっしぐらに走っていたかも知れない。そうでなければ、 路頭に迷った子羊のように、怯えながら人生を過ごしていたかも知れない。いや、も っと自由に憧れ、自己の探求と真理を求めて、世界を放浪していたかも知れぬ。山は 僕の生き方を、すっかり変えた。山は或る意味で、僕のアイデンティティを与えてく れた。何も後悔する事はないのだ。決して秀でた人間でもなく、決して劣った人間で もなかった。これが僕の天命であり人生なのだ。これでよかったのだ。

本当の幸せは自分の内にあり、決して外界には存在しなかった。花は開き、果実を付ける。果実は種を蒔き、未来へ子孫を残す。僕の三人の子供たちは、大きく逞しく育ってくれた。また、愛する妻は、こんな僕を影で支えてくれた。

人生は、ほんの一瞬、束の間の出来事に過ぎない。そして僕の魂は、宇宙のかなた を未来永却に旅するだろう。

会 員 近 況

"ガーデニング"ことはじめ

中村恵二

年寄りばかりが増えてゆくのに、滅 多矢鱈なカナ文字の和製英語の氾濫に は、ツネ日頃好い加減にしないかと思 っていた。ところが表題の「ガーデニ ング」なる言葉は、近頃の年寄りには 手離せなくなった最新版のカタカナ語 辞典にも、まだない。たかが、泥いじ りに毛の生えたようなことを、何で今 更、ハイカラ風に呼ばなきゃならんの か。西欧コンプレックスの日本人。殊 に東大法科出の官僚や若手の政治家、 学者、自称○○評論家等々が、所構わ ずカタカナ語を連発し庶民を煙に巻く し、マスコミが片棒を担ぐ。最近「デ **ィケ**ア⊢など福祉用語にも、カタカナ **添が**氾濫して世のヒンシュクを買い、 見直し論も出ているが、企業のカタカ **ナ社名**などの変更は、先ず不可能に近 いだろう。「サンデー毎日」の身分に **重づいた今の私にとって、たいして金** もかからず趣味と実益を兼ねた、一坪 アグリカルチャー(つまり極小規模農 ■のこと)を始めた。…これもガーデ **ニング**に入るのかな…それにしても園

「ねんりんピック」参加が目標です

河 上 洋 子

すっかり山から離れてしまって「熊本40山」にも参加出来ず、いろいろと、ご心配かけて申し訳なく存じます。元気でおります。本当は忘れられない山のことを、花や仲間の思い出と共に、書きたいと思っていました。もし元気でいましたら、次の「熊本50山」に

は是非参加させていただきます。花と 云えば、この春まで熊本日日新聞紙上 に連載された小説、宮尾登美子氏の

「天涯の花」の作中に、この小説の象 徴ともなったキレンゲショウマが出て きますが、この花は四国の剣山だけに 咲くとありました。ずっと昔、牧野富 太郎氏の「植物図鑑」でも、そう見た 記憶があります。でも、この花は白鳥 山にも国見岳にも、いっぱい咲いてい ることを、余程作者に伝えようかと思 ったことです。お節介な性分です。と ころで私は今、標記の目標に向かって 連日、猛練習(とは少々大袈裟ですが …) 中です。「熊本県武術太極拳連盟」 を旗揚げして、言い出しっぺの私も理 事の一人として、その世話に追われて います。これまで十数年、ただ好きで 太極拳をやって来ましたが、これから は全国統一の「段、級検定」、「公認 指導員資格試験」を実施しなければな りません。そのための講習会もありま す。生徒さんもそうですが私らも同じ です。この年齢になってテキストと首 っぴき、3日間泊まりこみ、夜昼なし の実技講習です。現役を離れて今更、 試験なんて、とボヤキながら。それで も、こんなに勉強したことはないと自 他共に認め、久しぶりに自分を何かに 追い込んで行くのは、一寸した快感で した。これに味をしめて、この秋、山 形県で開催される「ねんりんピック太

極拳の部」に出場することになったのです。これまで熊本県から、この部門の出場は、なかったので、「皆から大いなる期待をかけられている」と、勝手に信じこんでいる私ども60代、70代の7名です。気持ちだけは軒昴たるものですが…無事に終了したら、また山に復帰したいと、情報だけは収集している毎日です。

"私の1996年"

鶴 田 佐知子

沢山の仲間のお陰で、去年も山を楽 しむことができた。秋には、支部の九 重・黒岳の紅葉を楽しんだが、6月は じめの科学委員会探索山行では、長野 県真田村菅平の筑波大植物園で、ツキ ヌキソウを見て、電気通信大学宇宙電 波観測所の宿舎に泊まり、四阿山、根 子岳に登った。芽が出たばかりのシラ カンバ、ダケカンバの、葉の色の微妙 な違いに感激しアズマギクにも会うこ とができた。9月末には、「ジャック 93会」の登山集会に参加させてもら い、東北の栗駒山に登って、ハイマツ の中に映える、深紅のミネカエデの美 しさを満喫した。夜は、憩いの村「栗 駒」に泊まり、翌日はスリル満点の御 沢を、ひたすら下り世界谷地原生花園 ・に出た。10月初めには、全国支部懇

談会(東海支部)が奥三河であり、明 神山に登った。もう一泊して、鳳来山 にも登った。夜のバーベキューパーテ ィは、殊の外楽しかった。明神山は 1016mの低山だが、岩場が多く鎖場も 何ヵ所かあり、変化に富んだ面白い山 だった。エンシュウハグマや、花の時 季ではなかったが、ホソバシャクナゲ などにも会えた。これもJACならで はの、沢山の仲間との出会いの楽しさ である。花と云えば、会員の広吉さん に連れて行ってもらった大崩山群の、 五葉岳から夏木山、新百姓山縦走中の アケボノツツジ、また、京丈山のヤマ シャクヤクとクマガイソウの群生、阿 蘇南外輪の地蔵峠から冠ヶ岳、俵山へ の途中のマツムシソウの群生は、忘れ られない美しさだった。熊本アルコウ 会の例会にも、去年はよく参加した。 1月は私の好きな湧蓋山で、併せて筋 湯温泉のお湯を楽しんだ。3月は阿蘇 の御竈戸山。枯れススキに覆われた火 口縁を歩くと北側だけに白い霧氷がび **っ**しり着いて、美しかった。ここ10年 余り、外国人に日本語を教えるボラン ティアをしているが、8月に、その一 人を中国の長春に訪ねた。彼女と共に **北京**に行く途中、列車が錦州站に僅か な時間停車した。実は、ここは亡夫が 4才から12才まで育った所。その満鉄 宿舎は駅近くだったという。私にとっ ては去年一番の、感動の瞬間であった。

"私の近況"

樋口 格

馬場 猛氏の誘いを受けて、大した 山行の経験も無いままに、妻と二人で 熊本支部に入れていただいた。あれか ら早くも20数年の歳月が過ぎた。ま さに"光陰矢の如し"である。この間、 鬼籍に入られた大先達をはじめ幾多の 先輩会員のご指導を受けて、県内をは じめ、九州の名だたる山を踏破するこ とができた。私にとって貴重な経験を 積ませていただいた。感謝の他はない。 しかし、寄る年波には抗しきれず、最 近は、脚力の衰えを隠し難い。山との 縁も影をひそめつつある。ただし、支 部会員の皆さんとの交流は何よりの楽 しみで、例会その他の集まりには出来 るだけ参加したいと思っている。最近 は、40数年に亘る盆栽道楽に益々情 熱が高まり、盆友との交流、または各 地の見学等に奔走して、充実した余生 を送っている。熊本支部設立40周年 を迎えて、まことに慶びに堪えない。 過去の諸行事にも、数多く参加してい るので思い出に事欠かない。今後益々 の発展と、会員の皆さんのご健康を祈 念するや切である。

"私の近況から"

神谷平吉

平成7年7月11日、思いがけず開 腹手術を受ける破目になりました。山 への思い断ちがたく、翌日には立ち上 がり、翌々日からは1日3回、病院内 の廊下を散歩。8月中旬、退院後は1 日3回、階段昇降10回づつを日課と したリハビリに努めた結果、9月から は家内の応援を得て、山麓の林道歩き をはじめしまた。10月初めから阿蘇 南外輪の山々、金峰山系の二ノ岳、三 ノ岳などを訪ね、11月には祖母山系 の越敷岳、由布岳、根子岳などにも登 頂できる様になりました。爾来、用事 がない限り、週末には登山を心がけた 結果九州の山ばかりですが、平成8年 度には48回、今年は7月末までに丁 度30回の山行を重ねることが出来ま した。現在のところ、体力的には術前 の90%程度は回復してきている様に 思えるのです。何分にも、胃を半分程 度切除した関係で、食事に関しては、 まだ充分な自信が持てなくて、山小屋 泊まりやキャンプなどを組み込んだ山 行を計画出来ないのが残念です。せめ て、九州の山々の四季折々の自然の美 しさを充分堪能し、それをビデオに撮 影して編集の上、記録に留めることを 心がけています。今年、満70才を過 ぎた私にとって、分不相応な無茶な山

行は避けながらも、時間の余裕がある 時には、少し位ハードな山行にい山行にいるとか、登頂していなした、登頂していしたが自想の一つにしたが言むしています。田中澄江さんが言むしています。山は青春ので、澄んだ空気といるように、『山との思の音、澄んだ空気といるの樹林帯、清らかな風の音がなど。 一次でかな風の音がなど、岩との出来る、素晴らしいはで変大いもの出来る、素晴らしいましています。 と共々続けたいものと、希求しています。

"近況から"

神谷文子

平成7年7月、主人が大手術を受けることになって、山好きの主人を、しまりをの主人を、しまりになって復帰させたれる方に復帰させたで看病にに対するのでで、主人の男には待望の山に復帰することの目には待望の山に復帰することの目には、あれたの目、特には一人できました。その目、特には一人でがないます。ただ手術後は、食べています。ただ手術後は、食べています。ただ手術後は、食べています。ただ手術後は、食べたともあるので、山行の弁がないます。ただ手術後は、食べてといます。ただ手術後は、食べています。ただ手術後は、食べています。ただ手術後は、食べかには、動きを痛めることもあるのには、時間の経過と共に少していました。

アーしているようです。私の山行と云 えば、専ら主人と同伴なので、些か自 主性に欠けるところがあります。しか し、山行計画は必ず二人で相談して決 めています。時には、岳友の方たちか ら、お誘いを受けて行くこともありま す。今年の夏、主人は北アルプスの山 行を計画しようとしていましたが、食 事係の私としては、まだ幾分不安材料 があり、万一を考えると、どうしても 賛成出来かねました。結局、阿蘇、九 重、祖母、霧島など、九州の山々を訪 ねることで落ち着きました。しかし九 州の山と云っても、季節により、天候 により、千変万化する、大自然の素晴 らしさを感じることが出来ます。長い スパンで主人の体力を回復させて、私 **も**、もう少し体力をつけて、何年か後 には、二人三脚で、遠くの山々へも足 を伸ばすことが出来れば…と望んでい る昨今です。

自然保護を語るなら山に登るな!

広 吉 功

或るとき、冬の白馬岳合宿の帰途、 建八ヶ岳の山小屋に立ち寄ったことが ある。ロープウェイの駅から15分も 歩けば着く近さだが、この付近一帯の 亜山基地として、主に中高年の登山者 上人気がある、通年営業の小屋である。 上の小屋では、夕食が終わった時間に、

小屋の親爺か、小屋番との交流の時間 があると聞いていた。案の定、一升瓶 を抱えた親爺との語らいの時間が始ま った。語り合いと云うより彼の独壇場 で、演説をお客がにこにこしながら聞 くといった方が的を得ている。次第に 話が盛り上がり、山の自然保護につい て彼は、その実践者としての己を得々 と語り出した。客も相槌を打ち始めた が、つまりは山の木や花を大切にしよ う、山に持って来た物は全て持ち帰ろ う、便所の糞尿は土に返すとして、紙 などは備え付けの箱に入れ、俺が焼却 処分していると云うのである。私は、 すぐに「本当にそう考え、同意を求め られるのであれば、自然は自然の侭に しておくのが、真の自然保護であり、 こんな小屋は自然破壊の出発点で、こ こに集まる登山者も、また自然破壊者 ではないのか」と、切り返したところ、 親爺は黙って俯いた。我々登山者は、 植物や動物を育む自然の側から見ると、 招かれざる客である。人工登攀では岩 壁を荒らし、歩いては草花を踏みつけ、 所構わず排泄をする。山の自然を破壊 しているのは、他ならぬ我々ではない のか。最後に私は云った「本当の教育 とは、貴方の謙虚で敬虔な姿を見て、 ここに集う登山者たちは学ぶのです。 酒の席での説教じみた多くの言葉より、 貴方の後姿こそ説得力があるのです。」。 無口になった親爺は、一杯千円のぜん

ざい代を取り忘れた。いや、若しかし たら、サービスしてくれたのかも知れ ない?「最小限の犠牲」を、登山者た ちが実践してくれたら、もっと保護は 出来るし、次代に残せるかも知れない。 登山そのものを否定するものではなく、 自然破壊を最小限に留めるために実践 することは、登山者自身の意識改革の 普及である。山小屋の親爺がタクトを 振ったとしても、中高年登山者は協奏 曲を奏でることは出来ない。「自分も また、この美しい日本の自然の中で、 生かされているのだ」という意識の出 発点がなければ実質の伴わない、空論 に終わってしまうだろう。このことは、 親爺が一升瓶片手に説法した翌日の朝、 泊まり客の一人が、タバコの吸い殻を 無造作に投げ捨てていた事が、如実に 物語っていた。

"私の近況"

阿南誠志

先ず、支部設立40周年を心よりお祝い申し上げます。阿蘇山を朝な、夕な、見て育った私にとっては、山や、川や、草や、木は生活の全てで、何の魅力もなかった。それより都会で仕事ができることへの、憧れが大きかった。しかし今、自分の考えの基礎になっているのは、都会のビルや、コンクリー

ト道路や、車ではなく、草や木や、川 の水である。有難いことに、10年間 勤めた仕事を辞め、新しい、憧れの大 自然との生活に入ることが出来た。多 くの山仲間に育てられ、また兄弟以上 に、お付き合いをいただきながら25 年が過ぎた。今は八方ヶ岳の山麓、菊 鹿町に住んでいる。隣の家まで約1 *1 もある文字通りの山住まいである。朝、 小鳥の声に起こされて、馬、山羊、鶏 と一緒の生活である。動物たちと共に、 朝の一刻を過ごすのは楽しいことであ る。少しの畑と、柿の木も心を豊かに してくれる。自然を愛する山の仲間と、 日本の山々を歩き、海外の山へと足を のばす。私は、山登りは勿論好きだけ れど、山に行くとき一緒に歩く仲間の 声が好き、海外で出会える人が好き、 山で会える草や花が好きである。贅沢 な生活は出来ないけれど、贅沢な心の 生活をさせていだいている。

"ネパールからの便り"

加藤功一

私はいま、ネパールの山の中にいます。標高2500mで、両側にはアンナプルナ、ダウラギリなど、8000 mを越える峰が聳え、白銀に輝いています。3月1日に関西空港を出発して、一今日は15日です。帰国予定の3月2

4日から逆算すると、行程の半ばを過ぎたところです。日本人とは、まだー人も会っていません。今日までのトレッキングで、特に心に残ったことを書きたいと思います。それはロバのお話です。ネパールではドンキーと云通機関の役割を果たしています。日本で云通機関の役割を果たしています。日本でででは、長距離トラックのようなものです。パカラからムクチナームで10頭前後のロバが働いているのです。

ネパールの山道は、道幅が1 なもな く一歩誤れば千尋の谷で命はありませ ん。実際に、落ちて死んでいるロバを 見ました。ロバは、この悪路を100 kg以上の荷を括りつけられ、夜明け前 から、暗くなるまで、1週間も歩き続 けるのです。そして1週間後、全ての 荷がロバから卸された時の様子が印象 的でした。その時、ロバはどういう行 動をとったと思いますか?10頭の□ バ全部が、芝生に寝転がるのです。さ **も**気持ち良さそうに、仰向けになった り、横になったり、皆でそこら中を転 **げ回**るのです。体の自由を束縛した、 **重荷**から解放された快感を味わってい るのです。私は、ロバは何をしている **のか**、と地元の人に聞いたら、いつも **そう**するのだと教えてくれました。私 は、涙が出るような感動を覚えました。 ■は今日まで、電電公社、NTTと3

7年間も仕事をしてきました。退職までの1ヵ月間の休暇を利用して、十数年来願っていた、ヒマラヤ行きの希望を達成しつつあるからです。今の私の心境は、このロバと全く同じだからです。仰向けになったり、転げ回ったり、自分の态にして、ゆったりとヒマラヤトレッキングをして、最大に幸福な時間を送っております。

…タトパニ・ホテルにて…

"ファミリー登山"

田上敏行

昨今は、中高年登山がブームのよう だが、わが家は目下、ファミリー登山 ブームである。私と家内、それに今年 から小学校に入学した長男の3人で、 天気のよい休日は大抵、山に登ってい る。3人で登った山も、熊本40山に 選定された山のうち、すでに30山を 越えた。また年に一度は遠出し、これ までに立山、乗鞍岳、富士山に登った。 とくに昨年夏の富士山では、当時5歳 の長男は五合目から山頂まで、大人と ほぼ同様のペースで登り、親の私も驚 いた。同じ頃の自分自身を振り返って、 とうてい足元にもおよばない健脚ぶり に、改めて感心した。もっとも、こう して休日毎に山へばかり連れ出すのは、 長男にとっては大変、迷惑なことで、

おそらく親の身勝手に、内心閉口して いるに違いない。親の私としては、せ いぜい長男の機嫌をとりながら、でき るだけ長くファミリー登山を続けたい と願っている。私も50歳を間近にし て、最近は何となく体力の低下を自覚 するようになった。親の体力に反比例 して、長男の体力は日に日に成長して ゆく。現在のペースで、長男と登山を 続けてゆけば、体力の差は次第に縮ま り、いずれ遠くない時期に親子の体力 が逆転する時が、やってくるに違いな い。今のところ、まだ当分の間は追い 越されそうもないが、一方では早くそ の時が来て欲しいと、内心思っている 今日この頃である。

"私の近況報告"

吉 田 恒 子

今の私は、仕事が中心です。私は福 社関係の仕事をしていすが、それは、 高齢化社会到来の中での「老人処遇」 です。老人福祉施設の中でも、重度の 老人(要介護老人)を対象とした、特別養護老人ホームで働いています。所謂「寝たきり老人」「痴呆老人」を対象とした老人福祉施設です。これから失、ますます増えてゆくことで、日夜、大きな責務を痛感しながら頑張っています。処遇の面では、一人一人の老人

を大切にする「個別処遇」の充実、新 しく導入されようとしている「介護保 険」など、老人施設の大きな変革期に あたり、それらの対応に備えて勉強中 でもあります。私生活では、昨年、母 が他界しましたので、この先、仕事に 専念するため、長年住み慣れた土地を 離れ、仕事先に近いアパートを借り、 一人暮らしをはじめました。今は、一 人暮らしを淋しく感じる間もなく、多 忙な日々を送っています。そんな生活 の中での楽しみは、やはり大好きな山 登りです。それは、日常のストレス解 消の場であり、自然を求めての山行で す。今年に入ってから、大分の由布岳 に隣接する倉木山(1160m)と、九州 脊梁の最高峰、国見岳(1739m)から 五勇山(1662m)への縦走など、数少 ない登山でした。夏の楽しみは、何と いっても中部山岳の登山で、今年は、 北アルプスの立山周辺を計画しており、 8月中旬の出発を、今から楽しみにし ています。九州の山にはない、高峻山 岳の自然の美しさは、脳裏に焼き付い て忘れる事が出来ず、つい足が向いて しまいます。これが終わると、私の夏 も終わります。

登り続けて早や12年、何時までも 健康でありたいと願っている今日この 頃です。

和仁古 昇

今年の夏は早々と、7月初旬に南アルプスの北岳へ、キタダケソウの花を見に行きました。勇躍して出かけたつもりでしたが、こと志と反して、途中、リタイアの巳む無きに至り、まことに残念至極でした。

今度ほど自分の体力の限界を、強く 身に沁みて感じたことはありませんで した。これからは、マイペースで、ゆ っくり低山歩きを楽しみたいと思って います。

"偶 感"

後藤之俊

年一年と、老化を実感するこの頃で **あ**る。

去年は、楽々と登った山が、今年は、 気息奄々、漸く頂上を踏む。登山から **造山**に、切り換える時が来たようだ。 山に入って、山を遊ぶ…とするか。背 負う荷物は重ぐとも、日程に捕われず、 気ままに野宿しながら、思う存分、山 に溶け込み、山と戯れる。そんな山行 を始めようと、先日は、一際軽いツエ ルトを買ってきた。種田山頭火の句、 「分け入っても分け入っても青い山」 に、心境が近づいたというべきか。

"夏の八ヶ岳行"

出来田 耕 介

今年、7月20日前後の連休を利用して、八ヶ岳に行って来ました。心配した天気も上々で、北アの連峰、富士山等もきれいに見えました。前夜の列車での、通路のゴロ寝の疲れも忘れて、山々を堪能した幸せイッパイの数日でした。日帰りコースと思って、舐めてかかったせいか、文三郎道の階段が、少々堪えました。

"夏の北海道"

門脇愛子

最近は、膝を痛めて以来、自然探訪 ハイキングなどで、お茶を濁していますが、これも結構、年相応にゆっくり 楽しんでいます。7月末、かねての念 願が叶って、北海道の利尻島、礼文島 に行って来ました。しかと増の出来ました。1月本の山の姿を全く見ることが出来ず 残念でした。礼文では多少、花を楽しむことが出来ました。7月の中旬とでむことが出て、いつものメンバーとを 切っています。今年は立山、ゆっくり山行の予定です。

"夏の開聞岳"

石井久夫

7月末日、開聞岳に登りました。本 当は、暑いので登りたくなかったので すが、案の定暑さと、湿度の高さで、 水筒一本では水不足でした。靄がかか っていて、遠望は出来ませんでした。 やっと、眼下の池田湖が見えた位で、 海岸線もボヤッとしていました。宮崎 大学のワンゲル部の学生が、初めてだ と云うので同行したのですが、暑さに は参りました。夜は冷房が利いたログ ハウスで快適でした。8月1日に、鹿 児島市の水族館を見て、帰りました。

私の近況

工 藤 文 昭

2年後に迫った平成11年、熊本国 体登山競技の準備に追われ、支部の行 事にも失礼ばかりしています。「良い 登山」とは、どんな登山なのかと、自 問自答する度に「競技は登山に馴染ま ない」と、結論を出すのですが、仕事 を放棄出来ない苦しさがあり、ストレ スは溜まる一方です。8月2日から、 何もかも捨ててニュージーランドに向 かいます。昔、登ったマウント・クッ クを眺め、近くの小さな山を歩いて来 ます。また、自分を再生する旅にした ・フィニッシュは、20kgの負荷訓練。

いと思っています。

国体登山と高校総体登山

松本莞爾

熊本国体を2年後に控え、殆ど毎日 のように準備(会議)等が続いていま す。そんな中で、平成13年度の全国 高校総体登山大会も熊本開催が決定し、 本来の山行が出来ない状態が続いてい ます。平成11年の国体は工藤先生 (副支部長)と共に準備中ですが、熊 本県高体連では、本年度より専門委員 長となり全国高校総体の準備に入りま した。今夏は、そんな事で京都総体に は審査委員として参加しましたが総体 終了後は、プライベートな山行で北ア ルプスの剣岳に行って来ました。

南アルプス縦走

広永峻一

8月6日から9日まで、奈良で開催 される全国総合文化祭(高校総体)に 参加します。終って8月18日まで南 アルプスに入り、北岳から南部の光岳 まで、縦走を予定しています。そのた め7月から近くの立田山で、付け焼き 刃ですがトレーニングをやりました。

今回は、いつもの山の花の撮影は押さ え気味にして、期間内の完登を目指し ています。

パラグライダー

佐藤光俊

いつも皆様には、ご迷惑ばかりかけて心苦しく思っていますが、これに懲りずに宜しくお願い致します。現在、高千穂町内の親父山の山麓で、パラグライダー教室を開いております。皆様もお暇の折りには是非「四季の原キャンプ場」へお越し下さい。バラグライダー助教員の資格を取ったばかりで、今のところ他の事に振り向ける余裕がありません。そのうちに、何とか皆様と山行が出来るよう努力致します。

インドネシヤの山旅

池崎浩一

今年も本田さん(支部長)と二人で、 大阪の桑原さん(90 "日韓合同エベレ なト登山隊長)に誘われて、7月24 日から10日間、スマトラ島のケリン 野山(3805m)に登って来ました。ケ シンチ山は姿形から高さまで富士山に、 ★く似た山で、山麓(1500m)から一 二日で登ることが出来ました。富士 山で云えば、一合目から山頂を往復す るようなものでしたが、ジャングル内 の一本道は、雨に抉られて酷く崩壊し た悪路の連続でした。何しろ雨季には 3000%も降るそうですから登山道は川 に変わるのでしょう。しかし、さしも の悪路も標高3000紅を越えると岩磔帯 となり、まさに富士山を登っているよ うな感じでした。山頂は富士山と同じ ように、火口を取り巻く内輪山の最高 点にありました。火口は直径、深さと もに500気を越える巨大なもので、火 口底には円形の噴気孔を広げ、薄い噴 煙をあげていました。今回は登山だけ でなく、行く先々で現地の人と交流す る機会に恵まれました。登山口の村ケ リシクツォでは、二日間のホームステ イを体験しました。同行した若い通訳 の生家を訪ねたり、国営の製茶工場を 見学したりもしました。現地の人々の 「暮らし」に接し、様々な交流が出来 た事は、もう一つの旅の喜びであり、 成果だったと思っています。

熊本支部年表

1957~1997

1957~1			
年 別月 日	行 事	場 所	参加者
198032年 7.13	熊本支部設立総会	解釋一0詢(聖山荘)北田正三宅	9
(1957) ~14	(支部長)北田正三 (常務委員)西代他一	(雌科)地、三統 銘 龍 琳 蘸 敬、 青 森	
	記念登山 楢尾岳(1331m)		9
11. 17	秋季例会(熊本市内散策)	万月山一花岡山一北岡自然公園~レストラン山小屋(磐根会)	1 1
略133年 7.27	北田支部長遭難(駐) 65才	阿蘇高岳・置ケ峰東稜より松ケ尾谷藤頭に滑落(単独登撃中)	
(1958) 7.29	北田支部長の遺体搬出	熊本岳連遊遊遊歌紀か	(150)
8. 10	故・北田正三氏(熊本岳連葬)	阿蘇郡一宮町(阿蘇高枚講堂)※ 北田氏が県岳連会長のため	(500)
9. 27	支部臨時総会	大分県竹田市 首藤宗利会員宅	8
	北田支部長死去に伴い、三谷孝一氏を支部長に選任	•	
四 34年 5.23	昭和34年度支部総会	路赫昭爛(赤田ホテル)	6
(1959) ~24	記念登山 小岱山(501m)		6
	8臁)会 馬場 猛(4943)		
11. 25	日本山岳会 日高信六郎会長との座談会	熊本市出水町(水前寺荘) ※熊本岳連と共催	(35)
昭和35年	4月新会 宮崎豊喜(5074)		
(1960)	5購給 佐藤光俊(5117)		
	石井久夫(5120)		
6. 18	昭和35年度支部総会	划數師(法華院温泉)	6
~19	記念登山 大船山(1787m)		6
10. 23	第15回国民体育大会(熊本)	大会役員として支部会員も参加	
~27	登山競技(同葉山一帯で実施)		
136年			
(1961)			1
37 2. 3	昭和36年度支部総会	協にお芳野村(熊本アルコウ会山小屋)	(19)
(1962) ~4	記念登山 金峰山(665m)	熊本アルコウ会と合同	(19)
	5 關公 本田誠也(5421)		
6. 16	昭和37年度支部総会	阿蘇郡長陽村垂玉温泉(山口旅館)	
11. 17	秋季例会(清水寺~柳川)	福岡県筑後市船小屋温泉(楠風旅館)	4
■38年10.19	昭和38年支部総会	熊本市新市街(銀丁デパート)	8
(196 3)			
39 4			
(1964)			
40 4 6. 19	昭和40年度支部総会	阿蘇郡長陽村(荒牧旅館)	9
(1965) ~20	記念登山(髙原散策)	(湯の谷温泉)	9
11.20	日本山岳会創立60周年記念集会(熊本支部)	阿蘇郡南小国村(徹の本ユースホステル)	13
~21	記念登山 久住山(1787m)	三田幸夫副会長出席	13
41411.19	昭和41年度支部総会	字土郡三角町(時雨旅館)	8
(1966) ~20	天草下島、西端岸ドライブ		8
		·	

年 別月 日	事	場所	参加者	}
昭42年 7.23	支部設立10周年記念総会〉	嫌跡 (市房観光ホテル)	9	
(1967) ~24	記念登山 市房山(1722m)	藤井運平清護員 出席	9	L
11. 4	秋季例 会 国見岳(1739m)	上益城郡矢部町 内大臣キャブ場	9	1.
~ 5		降雨のため国見岳登山は中止し、小松神社を往復する。	9	
昭和43年				١.
(1968)				ľ
昭和44年	21新公田上敏行(6659)			
(1969)11. 22	秋季例会(夏臟の「戟」級・ស髄)	玉名郡天水町小天温泉(那古井館)	4	1
~23				
昭和45年	•			
(1970)				
昭46年 9.19	昭和46年度支部総会	阿蘇郡長陽村湯の谷温泉(蘇峰館)	. 10	ĺ
(1971) 11.6	秋季例会 越敷岳(1069m)	大分県竹町(首藤宗科会員宅) 枕旋亭(泊)	15	1
~7	…田原、緩木神社から往復…		15	
昭和47年 5.21	昭和47年度支部総会	阿蘇郡長陽村達玉温泉(国民宿舎 南阿蘇)	1 2	
(1972) ~22	記念登山 夜峰(913m)	•	1 2	
10. 28	秋季例会 雁俣山(1315m)	八間線片二本杉(路 刺鷹店)	11	
~29			11	
11. 11	特別例会(今日開始と登る会)	熊本アルコウ会、電電九州山岳会と合同	(14)	ı
	八方ヶ岳(1052m)			
昭和48年 5.19	昭和48年度支部総会	宮崎県高千穂町(民宿 四丘子)	9	
(1973) ~20	··· 高千 楼/银光·· ·	※ 支部費300円を500円に値上げ	9	
8. 9	第15回自然公園全国大会(阿蘇山) 大会役員参加	設強山 高岳(1592m)	2	
11. 11	秋季例会 大矢野岳(1236m)	地蔵峠から往復する。	4	
昭和49年 5.18	昭和49年度支部総会	阿蘇郡一宮町(北田宅)	10	
(1974) ~19	…北田正三氏 墓参 仙酔峡ハイク…		10	
	9勝紀 和仁古 昇(7778)			
10. 26	秋季例会 雲仙・普賢岳(1359m)	長崎県小浜町雲仙(丸登屋旅館)	7	
~27				
昭 050年 5.18	昭和50年度支部総会	熊本市花園町(枯原養贈場)	6	
(1975)11.15	日本山岳会創立70周年記念・九州3支部合同祝賀会	大分県九重町(新日鉄九重山荘) ※熊本支部 17名参加	(46)	١.
~16	記念登山 久住山(1787m)	今西端是長、劉建夫皇長、武一郎 端		
2 7. 24	昭和51年度支部総会	大牟田市新勝立町(樋口会員宅)	10	
(1976) ~25	記念登山 釈迦岳(願のため吐)	…日向神ダム、雲巌寺ドライブ…	10	1
	10) 新绘 工藤文昭(8190)			1
昭152年 5.28	昭和52年度支部総会	阿蘇郡高森町(南阿蘇国民林暇村)	17	
(1977) ~29	記念登山 清栄山(1006m)		17	
11. 3	文部設立20周年祝賀会	宮崎県高千穂町(民宿 おがたま)	(38)	
~6	記念登山 祖母山(1757m)	折井健一、望月達夫両福会長 出席		'
	…阿蘇・俵山、冠ケ岳、高岳、根子岳にも登る…			

年 別	月日	行事	場所	参加者
1 153年			玉名市立願寺温泉(山の家旅館)	16
(1978)	~12	記念登山 小岱山(501m) ·	岡田会員が、デンマーク、コペンハーゲンに低任のため	16
	4. 2	特别例会(全國部性と一等)無例に登る会)	歓迎 (14
	~3	4/2 阿蘇島帽子岳(1337m) 熊ノ岳(685m)	4/3 話・・舒加(1244m)	
		5購給 大木野徳敏(8395)		
		松本 莞爾(8411)		
	6. 3	昭和53年度支部総会	角膜部角膜的(電影社 外船上社)	13
	~4	記念登山 鞍 岳(1119m)	(役員成選)支部長 西水龍一	1 3
	9. 23	秋季例会 白鳥山(1639m)	八代郡泉村權木(民宿 山女魚荘)	17
	~24	…ウゲトノ谷から登る…		17
	9. 29	今西韓司先生 日本1000山港面稅實会	京都中京区(京都ホテル) 西代支部長、本田夫妻 出席	3
	12. 17		熊本市冼馬(会楽園)	. 17
154年	l I	特別例会(營酮性と顯如此登台)	矢山岳(869m)仰鳥帽子山(1302m)大翼山(9 02m)	
(19 79)	i 1		矢筈(687m)笠 山(56 7 m)	8
	6. 2	1	大分県九重町飯田高原(ペンション 古巣)	1 2
	~3	記念登山 三俣山(1745m)	`	1 2
		7勝从 門脇愛子(8605)		,
	12. 17		京都市東山区(都ホテル) 西沢支部長、本田夫妻 出席	3
554	1		熊本市手取本町(レストラン 山小屋)	2 1
198 0)			望月達夫(前副会長)石間信夫(静岡支部)本田、工廳	4
	~16			
		5月私会。今野善郎(8727)…觀息市唯…		
	5. 24		大分県久住町(法華院温泉) 西沢支部長、本田 出席	2
	~25	…降雨のため、久住山登山は中止…	Bridge Comm	_
	5. 31		阿蘇郡小国町ハゲ湯温泉(松屋旅館)	9
	~6. 1	記念登山 湧蓋山(1500m)	White the state of	9
	7. 27		養ケ峰・赤ガレ谷関門 北田レリーフ前	6
	10. 25	1	赞鳌山、由布岳、雁侯山、仰鸟帽子山、市房山	建20名
	-11. 2		※ 特別例会と連続実施。	10
564	1. 24		熊本市内野井町(ホルン山小屋)	16
:51)	1.31		登頂に買会(熊本交通センターホテル)	(12)
	~2.2	…三触、秃、舢、链、飌、餢、针、掘	※ 熊林県知事 秋田一精氏 出席	
	5. 23	昭和56年度支部総会	大分泉人住町(国民宿舍 人住高原在)	14
i	~24		安林君子。 她 就结月了日本一头:\	14
	10. 17	* * *	宮崎県五ヶ瀬町波場(民宿美山)	14
	~18	白岩山(1620m)	参わま中代サイン・リットロノ	1.0
7	1. 9	支部新年晚餐会 特別例会(全職部性と雄、嫌のは登録)	熊本市内野井(ホルン山小屋)	16
	2. 11	「行か」がリテス(写じ婦の「吐とれば、水路の山に立る会)	(北麓の山)紫尾山、岳山、鹿倉山、八重山、鳥帽子山、盗伐平、	(16)
	~14	切fn 5 7 在府士並必入	(球磨の山)高泉山、国見山	1 0
	5. 22	昭和57年度支部総会	福嶼世市秋月町(秋月在)	1 3
	~23	記念登山 古処山(860m)	屏山(927m)	1 3

年 別	月日	行事	 場 所	参加者
四57年			京都市中京区(京都ホテル) 西沢支部長 本田夫妻 出席	3
(1982)		秋季例会 清水峠(隴醂舢)	上益城郡清和村井無田高原(民宿 りんどう荘)	1 1
	~3	24 a P aud Praca of Chamber	The second of the SAI when the Add Add Add Add Add Add Add Add Add Ad	1 1
昭和58年	1. 8	支部新年晚餐会	熊本市内坪井町(ホルン山小屋)	19
(1983)	1		福町博多区(法華クラブ) 西沢支部長、本田 出席	(10)
	~30		※ 東九州支部と合同で実施。	`-
Ì	5. 28		阿蘇郡高森町(ペンション・フラワーガーデン)	1 4
	~29	1	I ministration of a constraint of the constraint	1 4
	- 7	5勝 以端		
		河上洋子(9402)		
	10. 6	中旗二夫妻と自然環境程度登山	(参加)西尺支部長、石井、奥野、本田	(6)
	10. d ~q	···大崩山、傾山九折越、阿蘇根子岳···		
	11. 12	秋季例会 諸塚山(1342m)	宮崎県五ヶ柳三ヶ所(民宿 佐藤)	9
	~13	八子/7五 四分四(1042m)	ロ門朱立ケ州門ニケがくが旧 四番グ	9
	11. 23	特別例会(金襴洗生と酵料の水電を会)	弁才天山、金峰山、野間岳、下山岳、清見岳、大野岳、尾巡山	(13)
	~27		相见了尼。	(13)
昭和59年			熊本市内野井町(ホルン山小屋)	18
(1984)	1		京都市中京区(京都ホテル) 西沢支部長、本田、和仁古 出席	1 - 1
(1304)	6. 23	1	阿蘇岛连山村(民宿大平)	1 1
	~24		※ 他山水原を散策する。	1 6
	2-4	9期後中村誓紀(9564)	W IDMINISC BOK 9 00	1 0
		藤木孝一(9574)		
	10. 20		宮崎県推築村(民宿 ひえつき荘)	1 5
	~21		台門を作業的人以他「ひんつき在フ	1 5
ĺ	11. 10	特別例会(一個別性と何知に登る会)	宮崎氏小綱が帰(民宿美山)	(30)
	~11	向坂山(1684m)	※ 東九州支部、宮崎支部と合同	(30)
昭和60年			熊本市内野井町(ホルン山小屋)	2 2
(1985)	1		※ 東九州支部、宮崎支部と合同	(23)
(1300)	~12		※ 水/切以吻、台灣太郎に口門	(23)
	3. 3	日本山岳会航立80時年(九州ブロック)記念晩餐会	御神火(数志強、強ゲランドホテル)	(96)
	J. J	本部から、佐々会長、山田副会長はか4名が出席…	※ 総本支部から西沢支部長はか9名が出席	1 0
		5.所会 鶴田佐知子(9549)	※ 元学人間が、フロベスの大きない。フログは統	1 1 4
	5. 18		上益城郡矢郡町(民宿 平家の湯)	1 6
	~19		上面侧切入即列(八配 十多少例)	1 6
	8. 17		大 は対路の計事を 田京覧(見空 - N / ビネン	1 1
			上益城郡精和村井無田高原(民宿 りんどう)	9
	~18		上来快搬走被收了点点,可点不到人人或水水, 土川县华东北部	(20)
	10. 18		上益城郡矢郡町(民宿 平家の湯)今西先生、九州最後の山行。	(30)
	~19	ı	₩ 東九州支部、宮崎支部と合同。 ************************************	(30)
	11. 9	秋季例会 江代山(1607m)	球磨郡水上村湯山温泉(神苑荘)	1 2
IIIIa C 1 h	~10		◆ → ナ → 広 + ト ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	1 2
聯61 年		支部新年晚餐会 ·	熊本市内坪井町(ホルン山小屋)	1 9
(1986)				

年 別	月日	行事	場所	参加者
昭和61年	4. 12	今西韓司先生・日本1500山登頂祝賀会	京都市中京区(京都ホテル)	4
(1986)	~14	···記念登山 白髪岳(1378m)本田、和仁古···	※ 館本支部から奥野、本田、和仁古、大木野が出席	2
	5. 24	昭和61年度支部総会	阿雄郡一宮町(阿羅蘭県保険保養センター)	20
	~25	記念登山 髙 岳(1592m)	(組織・) ら登る	20
	8. 16	夏季例会 国見岳(1739m)	上益城郡东部町(民宿 平家の湯)	15
	~17	··· 杉の木谷から登る···		
		9期後 樋口 格(9939)	•	
	11. 2	九州の山の集い"86みやざき(主管 宮崎支部)	宮崎、新樹(国路 計離)動するから12名は席	(79)
	~3	第2回宮崎ウエストン祭 記念登山・祖母山(1 7 57m)	本部から今西夷越会長、大塚副会長、西國栄三郎氏等山路	
	11. 9	馘 鞮 三谷孝一氏 死去(887)		
昭和62年	1. 11	支部新年晚餐会	熊本市内坪井町(ホルン山小屋)	20
(1987)		3朋从 馬場博行(10008)		
	5. 30	昭和62年度支部総会	所能限制(国民富舍 南所族)	13
	~31	記念登山 御竈 門山(1153m)		1 3
		6鵬从 広永峻一(10080)		
	8. 8	夏季例会 白髪山(1244m)	球部が付ける。 いっきま)	9
	~9	…五本村の一等三角点の山…		
		11朋徒 神谷平吉(10185)		'
		神谷文子(10186)、		
	11.14	支部設立30周年記念集会)	阿雄郡高森町(南阿雄国民休暇村)本部から今西夷地会長ほか2名	(51)
	~15	記念登山 根子岳(1408m)	斎藤京都支部長、梅藤福岡支部長、魚本宮崎支部長 ほか出席	(51)
19863年		支部新年晚餐会	熊本市内坪井町(ネルン山小屋)	28
(1988)		2期6 加藤稜子(10232)		
		吉田恒子(10233)		
		矢毛石豊(10239)		
		長田光義(10240)		
	2. 11	日・中・ネ 3国友好登山隊(馬場博行隊員)社行会	熊本市千葉城町(熊本厚生年金会館)	(25)
	3. 29	5916 多田隆峰会員 死去(60才)		
	4. 23	春季例会 目丸山(1341m)	下益城郡祗用町(歴長荘) ※ カタクリの花を訪ねて	1 9
	~24			
		5鵬人 広吉 功(10278)		
	5. 15	昭和63年度支部総会	熊本市大江5丁目(NTT熊本会館)	1 7
		(役員改選)支部長・奥野正亥 嗣技部長・本田誠也		
	8. 6	夏季例会(山の畑とビールのタベ)	態本市内坪井町(ホルン山小屋)	16
	10.15	秋季例会 上福根山(1645m)	人代郡泉村權木(民宿 權木山莊)	21
	~16	山大切(1621m)		2 1
1		11朋从 / 阿南誠志(10390)	W-1-1-12 1 1 1 1 1 1 1 1 1	
164年	1. 7	支部新年晚餐会	態本市内坪井町(ホルン山小屋)	2 5
報辞		1勝及 藤本多加志(10422)	たさせるサルスト → IL/A: > 本一	
(1989)	3. 12	春季例会 仰烏帽子山(1302m)	…福寿草の花を訪ねて、元井谷から登る	1 3
		4勝冷 池崎浩一(10432)		
	5.14	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	熊本市大江5丁目(NTT熊本会館) ※ 支部報第1号発行	2 3
	LL	6勝人会 宮崎 守(10503)		

年 別	月日	行事	場所	参加者	
\$\$\$64年		夏季例会(如頰とヒールロタヘ)	熊本市大江5丁目(ホルン山小屋)	23	4
 被 流		7勝26 出来田耕介(10522)			
(1989)	10. 7	自然保護全国集会	長野県戸隠高原(もみのき山莊) 本田、馬場夫妻 参加	3	
()		記念登山 黒姫山(2058m)	飯棚山(1917m)火打山(2462m)炒高山(2546m)	L	
	10. 21	秋季例会 白髪岳(1416m)	人吉市(国民宿舎 くまがり荘)	19	13
	~22				
	10. 28	全国支部懇談会(89"婚知嗓叭)	・・・鳥取県米子市(昔生グランドホテル)	6	
	~29	記念登山 伯耆大山(1711m)	(参加)與野支部長、本田、石井、門脇、鎮田、加藤		
平成2年	1. 13	支部新年晚餐会	熊本市内坪井町(ホルン山小屋)	2 5	
(1990)	2. 11	冬季例会 九重・中岳(1791m)	大分県久住町(国民宿舎 久住高原荘)	10	
1	~12	…冬山枝精緑線、沢水より稲星山(1774m)経由…	· .		-
	5. 13	平成2年度支部総会	熊本市大江5丁目(NTT熊本会館) ※ 支部根第2号発行	1 4	1
		7勝及/深堀弘泰(10751)	·		
	8. 25	夏季例会(山の畑とピールのタベ)	熊本市内坪井町(ホルン山小屋) ゲスト 古原和美氏	2 2	ľ
	10. 7	8412 内田英夫会員 死去(77才)	,		-
	10.13	全国支部懇談会(90"缸)	山形県蔵王温泉(蔵王アストリアホテル)本田、石井 参加	2	
	~14	記念登山 蔵王山(1841m)	月山(1979m)にも登る		١.
	10. 27	秋季例会 石堂山(1547m)	宮崎県西米良村村所(富士屋旅館)	1 4	1
	~28	天包山(1189m)			l
	11. 3	東九州支部航立30周年記念集会(90 "由布岳の集い)	大分県湯布院町(瀑布院ハイツ)	5	
	~4	記憶山 邮岳(1584m)	(参加)奥野支部長、本田、馬場夫妻、田上		
	11. 6	4425 玉名金助会員 死去(92才)			
平成3年	1. 12	支部新年晚餐会(鸚拉縣 純会關股)	熊本市内呼井町(ホルン山小屋)	25	
(1991)	3. 23	春季例会 傾 山(1602m)	宮崎県新春町(国民宿舎高千春柱)	14	
	~24	…見立より九折越し経由…		ļ	
		5勝後 中本 環(10921)	· ·		7
	5. 11	平成3年度支部総会	熊本市内坪井町(ホルン山小屋) ※ 支部根第3号発行	18	1 8
	8. 24	夏季例会(心腫とど-ルグペ)	熊本市内坪井町(ホルン山小屋)	2 1	ł
	10. 19	秋季例会 烏帽子岳(1692m)	人代為別人人重(民宿 山女魚荘)	10	l
	~20	…モハチ谷から九州有架の鳥帽子岳に登る…			
平成4年	1.11		熊木市内呼井町(ホルン山小屋)	2 5	
(1992)	1	2 開入 後藤之俊(1119)			
	3. 7	春季例会 万年山(1140m)	大分県玖珠町万年山温泉(美人の湯)	1 5	
	~8				2
	4. 25	平成4年度支部総会	熊本市内坪井町(ホルン山小屋) ※ 支部根第4号発行	18	
		(役員改選)支部長・本田誠也 副支部長・和仁古昇	支部範囲・奥野正亥	.	
	7. 4	九州四支部合同会議(福岡支部 主管)	大分県玖珠郡九重町筋織温泉(八丁原ビューホテル)	(11)	1
	~5		(出席)本田支部長、和仁古副支部長		
	7. 12	ヒマラヤ登山隊撤励会(チョーオュー/シシャパンマ)	能本市千葉城町(熊木厚生年金会館)	(33)	1
		…主催・カトマンズクラブ 馬場博行隊員、鍵正博隊員…			
	7. 18	•	アサバスカ峰(3491m)登山とロブソン山麓トレッキング	10	
	~27	CL. I集 SL. 姞	P. 4田、研、蘇、蘇、 城、 秘古、河、 大林野		

年 別	月日	行 事	場所	参加者
靴4 年	7中~10下	チョーオュー/シシャパンマ登山隊(カトマンズクラブ)	馬場隊員、チョーオュー(8201m)の無機素登頂に成功	1
(1992)	8. 30	夏季例会(ピールパーテイ) …制釧酷…	戴木市内坪井町(ホルン山小屋)	23
	10. 31	平成4年度全国支部整法会(92 "英珍山の集い)	福製即福祉時(国民格 ひこさん) 本田、和江古、西沢、	10
	~11.1	記憶 英仙(1200m)	研、毗、祉、蘇、城、縣接(雌)	
	11.3	第8回宮崎ウエストン祭(宮崎支部・主管)	部鎮新物三給	5
		記念登山 制形山(982m)	(麴) 本时報、劈、配、肚、裆	
	11. 14	秋季例会 冠 岳(828m)	宮崎原在州都五ヶ神町製鋼(高千種屋)院)	15
	~15	··冠岳八十八ヵ元&り···		
	11. 29	ヒマラヤ登山隊報告会(馬場博行隊員)チョーオュー無意業登頂	熊本市大江5丁目(NTT熊本会館)	(24)
靴5年	1. 9		態本市内好井町(ホルン山小屋)	27
(1993)	, ,		糖缸材調(賭 調)	11
	~7	…元井谷に福寿草の花を訪ねて…		
	4. 25	平成5年度支部総会	熊本市内坪井町(ホルン山小屋) 兼 支部構第5号発行	21
		7鵬分 丸尾龍一(11538)		
	8. 22	夏季例会(ビールバーテイ)	態本市内坪井町(ホルン山小屋)	1 8
	9. 25	九州四支部合同会議(鮴城 锴)	阿雄郡―宮町(民宿 阿雄の四季)	(46)
	~26	記念登山 高 岳(1592m)	(出席) 熊本25名 福岡9名 東九州5名 宮崎7名	
	10.14		熊本市内坪井町(ホルン山小屋)	18
	10. 23	平成5年度全国支部整理会(山際支部主管)	山熱県北巨摩郡須玉町(増富温泉野) 本田玄部長、門脇、韓田、	3
	~24		10/25 本田、金崎山(2598m)に登る。	_
		第9回宮崎ウエストン原(宮崎支部 主管)	宮嶼新樹(三給) 鸚、酥、椒、肚、梶	5
和6 年		支部新年晚餐会	態本市内坪井町(ホルン山小屋)	20
(19 94)			宮崎県西日井郡日之影町見立(あけばの荘)	15
	~13	··大欢谷から登る。お姫山、化社山経由下山··	あしかよ屋は80/13、11屋N	
	4. 24	平成6年度支部総会	熊本市内坪井町(ホルン山小屋)	17
		6勝冷加藤功一(11771)	#k (1.0
	8. 21	夏季例会(山の畑とビールのタベ)	熊本市内坪井町(ホルン山小屋)	19
	10.15	10期6 太田章雄(11856)	「中央は銀色体の マヤビノ a トェーンを発払へ	
	10. 15	平成6年度全國支部懸念(関西支部主管)	兵庫県関宮町ハチ高原(バークホテル白樺館)	2
	~16	記憶山 水/山(1510m)	(出席)本町部長、西沢 コチム (山麻)土田土曜日	9
	11. 2	九州四支部合同会議(宮崎支部 主管) 記念登山 筒ヶ岳(1296m)	踏場計劃近所線 三殆 (端)本玻報、 、	9
	~3	日本山岳会中大地震会(95"マカルー登山成員紹介)	111_11前又30次、23代、121、1155、第4、1566、24名、1911 東京都(新高齢プリンスネテル)	
	12. 3	「日本山田会社人物党会(90・イルルー立山教員和のフ)	RXがい前時間プリンスやアルフ (出席)本田支部長、西沢、門脇、馬場博行	4
季核 7年	1. 8	支部新年晚餐会	(10%)今四又の反、CMT、「MS、馬場同打 能本市千葉城町(能本厚生年金会館)	22
11995)	l i	2 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	※本中丁泉県門(※本厚生年金云思) 能本市千葉城町(総本厚生年金会館)	(21)
	3. 18	春季例会 夏木山(1386m)	大分見字目町大道鉱山(民宿 梅路)	7
	~19	一般を発する…	人の米丁ロット明明以下が出 海ボノ	'
	4. 23	平成7年度支部総会	能本市大江町5丁目(NTT能本会館)	1 4
	5. 27	松島 () 	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	4
	~29	社会专业 包含体系(1935m)	(4
	6. 17	日本山岳会創立90周年記念集会(九州地区・東九州支部主管)	大分市府内町(コンパルホール)	4
	~18	記念登山 九重·平治岳(1643m)	人が中的です。	4
L	~10	配名豆川 八厘、十位出入1042四)	[【多限/四爪、石井、皿上、時場時1]	l

年 別	月日	行事	場所	参加者
1城7年	8. 27	夏季例会(心頓とビールのタベ)	熊本市千葉城町(熊本厚生年金会館) ※ マカルー登山報告会	1 6
(1995)		10勝从 ,并手雅捷(12113)		
	10. 28		八代郡泉村撒木(民宿 權木山在)	1 2
	~29	…峰越林道から唐谷ルートを登る…		
平成8年	1. 7		熊本市千葉城町(熊本厚生年金会館)	2.5
(1996)		…前支部長 奥野正亥氏 名誉会員に新任を祝って…		
		春季例会 白髮山(1244m)	降雨のため参加者が減り、3名(広吉、鶴田、加藤綾子)参加	3
]]		マナスル登頂40周年記念集会(福岡支部主管)	北九州市(西日本工業俱楽部)本田支部長、西沢、馬場夫妻 出席	
	4. 21		能本市大江5丁目(NTT能本会館)	15
		(役員改選)副技部長、神俗平吉、工黨文昭、	会监事中的定 發 広水岭 起龍	<u> </u>
	8. 25	夏季例会(心腫とど-ルのタヘ) ※ 訓離絵	熊本市千葉城町(熊本厚生年金会館)	17
	10. 5			
	~6	記念登山 野神山(1016m)	(出席)韓田	1
	10. 19		大分県庄内町、白水鉱泉(白泉荘)	1.5
	~20	… 縦走班と男徳、風穴班に分かれ天狗(1556m)で合統一	· ·	
	11. 3	第12回宮崎ウエストン祭(宮崎支部 主管)	宮崎県高千穂川五ヶ所高原 三秀合	6
		記念登山 越敏岳(1069m)※ 神豚から登る	(出席)本时变部長、佐藤、田上、丸尾、長田、太田	
平成9年		支部新年晚餐会	熊本市千葉城町(熊本厚 生年 金会 館)	19
(1997)		春季例会 牛ノ峠(918m)** 等態心	宮崎県都城市安久温泉(金御岳荘)	16
	~16	…干支の山に登る…		İ
	4. 20	平成9年度支部総会	能本国家交流会館	17
		(役員改選)委員 門數學子、馬場制行	(自然保護委員)館田佐知子、広永岭一	
	8. 24	夏季例会(山峽配 ビールのタベ)	熊本市千葉城町(熊本厚生年金会館)	18
	1			
	•	i		
	1			
		•		
		İ		
	İ	•		